

西渋田遺跡・東渋田遺跡

— 和歌山橋本線道路改良事業に伴う発掘調査報告書 —

2015年9月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

伊都郡かつらぎ町に所在する西渋田遺跡及び東渋田遺跡は、東西に連なる龍門山系を背にし、和歌山県北部を西流し紀伊水道に注ぐ紀ノ川の南側に所在しています。

両遺跡とも、古くから縄文・弥生時代の遺物などが多く採取されてきたことから、紀ノ川南岸に位置する主要な遺跡として知られてきました。

今回、当文化財センターでは、和歌山橋本線道路改良事業に伴い発掘調査を実施する機会を得ました。その結果、弥生時代・古墳時代さらに中世といった幅広い時代の遺構を検出し、これまで不明であった両遺跡の一端を垣間見ることができました。とりわけ東渋田遺跡においては、これまで当地周辺で確認されていなかった弥生時代中期前半の竪穴建物跡を検出することができ、集落の展開・変遷を考える上で貴重な資料を得ることができました。

ここにその成果を発掘調査報告書として刊行いたします。本書が県民のみならず、より多くの方々が歴史を知るための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりご指導、ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 27 年 9 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理 事 長 櫻 井 敏 雄

例 言

1. 本書は和歌山県伊都郡かつらぎ町に所在する西渋田遺跡及び東渋田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・出土遺物等整理業務は、和歌山県伊都振興局の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査及び出土遺物等整理業務に係る体制は以下の通りである。

事 務 局 長 田中 洋次(平成 23 年度) 勝浦 久和(平成 25 年度)

 米田 良博(平成 27 年度)

事 務 局 次 長 山本 高照(平成 23 年度)

埋蔵文化財課長 村田 弘(平成 23 年度) 井石 好裕(平成 25 年度)

 土井 孝之(平成 27 年度)

発掘調査担当 津村かおり(平成 23 年度・西渋田遺跡)

 村田 弘(平成 25 年度・東渋田遺跡)

出土遺物等整理担当 村田 弘(平成 27 年度)

4. 本事業に際し、伊都振興局並びに和歌山県教育委員会、地元自治会、調査地近隣の方々から多大なご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表す。
5. 出土遺物は和歌山県教育委員会が保管し、発掘調査・出土遺物等整理作業で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳等の記録資料は、当センターが保管している。

凡 例

1. 実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系(世界測地系)を基準とし、数値はm単位で表示している。また図示した北は座標北を示す。
2. 発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位(T. P.)を基準とした。
3. 土色・出土遺物の色調は小山正忠・竹原秀雄編著(農林水産省水準技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)『新版標準土色帖』2005 年度版を基準とした。
4. 遺構番号は基本的に発掘調査時の登録番号を踏襲した。
5. 報告書掲載遺物については、通し番号を付け、遺物番号と写真番号は一致する。

本書掲載の遺構平面図・断面図・出土状況図は、基本的に縮尺 1/80、1/60、1/40 とし、遺物の縮尺は土器・石器は、基本的に縮尺 1/4、1/2 とし、遺構・遺物共に各図にスケールを表示した。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過……………	1	第5章 東渋田遺跡の調査成果……………	16
第2章 遺跡の位置と環境……………	2	1 1・2区の調査区及び遺構……………	16
1 地理的環境……………	2	2 3～9区の調査区及び遺構……………	21
2 歴史的環境……………	3	3 遺物……………	28
第3章 発掘調査の方法……………	4	4 まとめ……………	30
1 調査区の設定……………	4		
第4章 西渋田遺跡の調査成果……………	5		
1 基本層序と遺構面……………	5		
2 主要遺構……………	8		
3 遺物……………	12		
4 まとめ……………	15		

挿図目次

図1 遺跡の範囲と周辺の遺構……………	2	図11 東渋田遺跡調査区……………	16
図2 調査区の位置と地区割……………	4	図12 東渋田遺跡(1区)全体図及び基本層序……………	18・19
図3 西渋田遺跡全体図及び基本層序……………	6・7	図13 東渋田遺跡(2区)全体図及び基本層序……………	20
図4 030 竪穴住居平面図・断面図……………	8	図14 東渋田遺跡(3～9区) 全体図及び基本層序……………	22・23
図5 掘立柱建物平面図・断面図……………	9	図15 330 溝平面図・断面図……………	24
図6 080ピット・135 竪穴住居・090 土坑・ 100 土坑個別遺構図……………	10	図16 4026 竪穴住居平面図・断面図……………	24
図7 066・059・072 溝 平面図・断面図……………	11	図17 4～9区個別遺構断面図……………	25
図8 西渋田遺跡出土遺物実測図(1)……………	13	図18 809 竪穴住居平面図・断面図……………	27
図9 西渋田遺跡出土遺物実測図(2)……………	14	図19 東渋田遺跡出土遺物実測図(1)……………	28
図10 西渋田遺跡出土遺物実測図(3)……………	15	図20 東渋田遺跡出土遺物実測図(2)……………	29
		図21 東渋田遺跡出土遺物実測図(3)……………	30

表 目 次

表 1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程 …… 1	表 3 出土遺物観察表(石器) …… 35
表 2 出土遺物観察表(土器) …… 32	

図 版 目 次

【西渋田遺跡】

写真図版 1 1. 調査地遠景 1 (北西上空から)	写真図版 9 1. 1-1区西半部全景(東から)
2. 調査地遠景 2 (南東上空から)	2. 1-2区全景(上空から)
3. 1区全景(上空から)	3. 1-2区西端部遺構(東から)
写真図版 2 1. 1区全景(東から)	写真図版 10 1. 2区全景(上空から)
2. 1区 030 竪穴住居(上空から)	2. 2区南東側遺構群(北西から)
3. 1区 030 竪穴住居(南から)	3. 315 溝半裁状況(南から)
写真図版 3 1. 1区 035 土坑遺物出土状況(北から)	写真図版 11 1. 3~9区調査地遠景(南東上空から)
2. 2区全景(上空から)	2. 3-1区全景(上空から)
3. 2区全景(南東から)	3. 3-1区全景(東から)
写真図版 4 1. 2区掘立柱建物跡(上空から)	写真図版 12 1. 3-1区 330 溝(南南東から)
2. 2区 135 竪穴住居(南から)	2. 3-1区 330 溝遺物出土状況(北東から)
3. 2区 100 土坑遺物出土状況(東から)	3. 3-1区 330 溝セクション(東から)
写真図版 5 1. 2区 080 ピット遺物出土状況(東から)	写真図版 13 1. 4-2・5-1区全景(東から)
2. 3区全景(上空から)	2. 4-2区西端遺構群(北西から)
3. 3区 066・059・072 溝(西から)	3. 4-2区 401 土坑(北西から)
写真図版 6 西渋田遺跡出土遺物(1)	写真図版 14 1. 3-2・4-1区全景(東から)
写真図版 7 西渋田遺跡出土遺物(2)	2. 4-1区 4026 竪穴住居(北から)
	3. 4-1区と3-2区の境段差状況(北から)
	写真図版 15 1. 7-2・8・9区全景(上空から)
	2. 7-2・8・9区全景(西から)
	3. 8・9区竪穴住居 809(西から)
	写真図版 16 東渋田遺跡出土遺物(1)
	写真図版 17 東渋田遺跡出土遺物(2)

【東渋田遺跡】

第1章 調査の経緯と経過

西渋田遺跡及び東渋田遺跡は、和歌山県伊都郡かつらぎ町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。和歌山県伊都振興局建設部により、主要県道和歌山橋本線の道路改良工事が計画され、その予定地の一部が上記の両遺跡に該当することが判明した。このため関係法令に基づく諸手続きを経て、和歌山県教育委員会が確認調査を実施することとなった。

このうち西渋田遺跡については、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課）により平成22年6月～7月に第1次調査掘・確認調査が実施され、平成22年12月に第2次調査掘・確認調査が実施された。また東渋田遺跡については、平成23年11月から翌24年2月にかけて4次にわたる確認調査が実施された。その結果、両遺跡とも対象地の一部については埋蔵文化財が展開する可能性が高いものと考えられ、記録保存目的の本発掘調査が必要と判断されるに至った。

これを受け、県文化遺産課の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

下表にも明示したようには西渋田遺跡の本発掘調査は、平成23年9月から同年12月まで、東渋田遺跡については平成24年5月から平成25年11月まで実施した。

調査については、両者とも工事請負方式で実施し、基準点測量および航空写真撮影についても専門業者に委託して実施した。なお、東渋田遺跡については、遺構平面図は航空写真測量により図化を行っている。

なお、西渋田遺跡の調査では、近隣住民の畑地等への通路確保のため、調査区を3分割にして行った。調査地西側から1区・2区・3区と設定し、1区・3区から調査を行い、調査終了後、1区・3区の埋め戻しを行い、3区に通路を確保した後、2区の調査に取り掛かった。

東渋田遺跡についても土置き場や調査区に隣接する居宅への通路を確保するなどの条件から、全調査区を9区に分割して調査を実施した。また、両遺跡とも調査途中で近隣住民を対象とした現地公開を実施した。

上記のように2年次にわたる現地での発掘調査を終え、平成27年5月から同年8月にかけて両遺跡を対象とした整理業務を実施し、本書を刊行した。

	年度 月	平成23年度												平成24年度												平成27年度																	
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3						
西渋田遺跡調査										■	■	■																															
東渋田遺跡調査																		■	■	■	■	■																					
出土遺物等整理 (報告書印刷期間含む)																																											

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程

第2章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

西渋田遺跡は紀ノ川中流域の和歌山県伊都郡かつらぎ町西渋田に所在し、遺跡の範囲は東西約800m、南北200mを測る。また、東渋田遺跡は、同町大字東渋田・西渋田・島にかけて広がる遺跡で、その範囲は東西約600m、南北約400mを測る。両遺跡は東西に並ぶかたちで隣接しており、今回の調査地点で言えば、両者は1kmほど離れている。

かつらぎ町は和歌山県の北東部に位置し、北には大阪府との県境となる和泉山脈が走り、南には紀伊山地の一支峰である龍門山系が迫る。この間を紀ノ川が西流し、和歌山市の西部で紀伊水道に注いでいる。紀ノ川両岸には河岸段丘が形成されるが、高度差によって高・中・低位の三段階に分類でき、段丘は北岸の方が南岸に比べて発達している。

西渋田遺跡の付近は、標高60mから80mの低位段丘で、紀ノ川に堆積した平坦面が隆起し形成されたものである。遺跡の北側に広がる島地区は、紀ノ川の曲流によって両岸が浸食され形成された氾濫原であり、遺跡北端は段丘崖となっている。調査地付近の現況は、集落と果樹園であった。

東渋田遺跡の所在地の地形分類は、紀伊山地北縁にあたる龍門山系の東部北麓、紀ノ川南岸に広がる低位段丘面に相当する。調査地の現況は、西側は果樹栽培に利用されていた耕地で、東側は宅地跡及び駐車場であった。なお、今回の調査地は遺跡範囲のほぼ中央に該当する。調査地のすぐ北側付近で段丘崖となり、調査地の更に東側には、紀ノ川の支流である四巴川が南北に流れている。

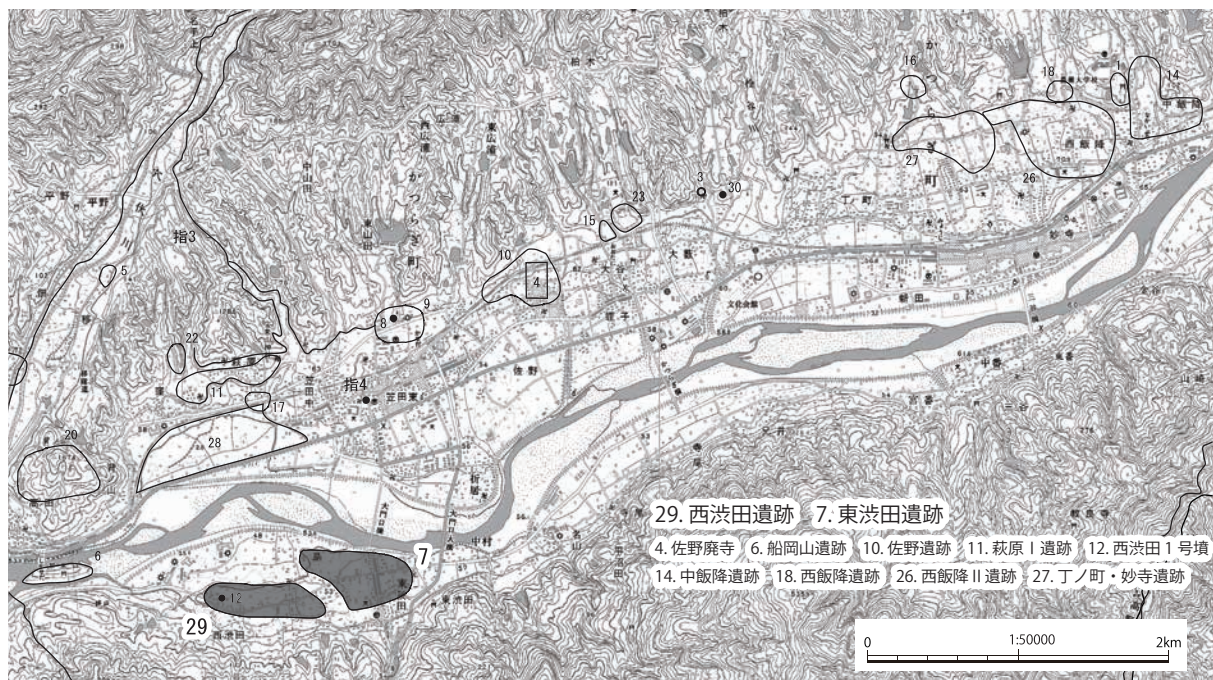


図1 遺跡の範囲と周辺の遺跡

2. 歴史的環境

西渋田遺跡、東渋田遺跡が所在する紀ノ川中流域は古くから人々の営みが確認されている地域であり、歴史時代に入ると早くから寺院が建立され、官道が整備されるなど活況を呈していた地域でもあった。以下、周辺の遺跡について概略する。

縄文時代の遺跡としては、西方2 kmほどの紀ノ川の中島にある船岡山遺跡では、縄文時代草創期の木葉型尖頭器が確認されているほか早期の土器や中期初頭の鷹島式土器が出土している。紀ノ川北岸においてはこの時期の遺跡として丁ノ町・妙寺遺跡や中飯降遺跡が知られている。とりわけ中飯降遺跡では後期後半に比定されている大型の竪穴建物が複数棟確認されている。

弥生時代の遺跡としては、先述の船岡山遺跡において中期末から後期の集落が見つかっており紀ノ川の中島という特殊な立地から防御施設的な性格をもつ可能性が指摘されている。北岸の西飯降Ⅱ遺跡では、前期中段階の土器が出土しているほか中期の竪穴住居、方形周溝墓、土器棺墓などが見つまっている。同じく北岸の佐野遺跡では中期のほか後期から古墳時代への移行期（庄内式併行期）の集落が確認されている。

古墳時代の遺跡としては、北岸の西飯降Ⅱ遺跡が知られており、ここでは中期から後期の集落が見つまっている。南岸では西渋田遺跡内に所在する西渋田1号墳が知られており、この古墳は周溝をもつ直径6 mほどの円墳で、埋葬施設は箱式石棺である。棺内からは頭蓋骨の一部と歯・大腿骨の一部が出土している。また、副葬品は直刀1振が足元に置かれた状態で出土している。石棺や直刀の形式から5世紀代に比定されている。

古代に入ると紀ノ川北岸域は活況を呈する。古代寺院のひとつである佐野廃寺が建立されるほか官道である南海道が整備され、東渋田遺跡の対岸にあたる大字萩原には駅家が置かれていたという説もある。また平安時代には、前述の西飯降Ⅱ遺跡や丁ノ町・妙寺遺跡において主軸を揃えた掘立柱建物8棟が確認されるとともに、役所的な性格を垣間見できる円面硯や墨書土器が出土している。

これに比べて、西渋田遺跡や東渋田遺跡の所在する南岸域では平地部（段丘面）が少ないこともあってか、この時期に活況を呈する遺跡は数少ないと言えよう。ただ、こうした中で近年（平成22年）、町立笠田小学校の改築工事に伴う東渋田遺跡の発掘調査が実施されたが、この調査において奈良時代の倉庫と思われる建物跡が確認されており、集落はその後も平安時代を通して存続し、鎌倉時代初頭まで継続していることが判明した。

また、その後16世紀後半になって再度集落が形成されていたようで、ここでは喫茶に使う風炉と思われる土器も出土しており、一般の集落ではなくこの地域の拠点的な館といった性格が伺えるとされていることは注目に値しよう。

第3章 発掘調査の方法

調査は、原則的に当センターの定めた『発掘調査マニュアル(基礎編)』(2006年4月)に準拠して作業を進めた。発掘調査で使用した調査コードは、西渋田遺跡が11-07・29(2011年度-かつらぎ町・西渋田遺跡)、東渋田遺跡が13-07・007(2013年度-かつらぎ町・東渋田遺跡)である。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用い整理・管理している。

1. 調査区の設定

実測図作成や遺物取り上げの際に用いた調査区の地区割の基準線は、平面直角座標系(世界測地系)第VI系の座標軸を使用し、数値はm単位で表示している。地区割の基点はこれまでのかつらぎ町域の調査と同じく町域を網羅する基点(X=-186.00km, Y=-42.00km)を設け、この基点から西方向と南方向にそれぞれ1km四方の区画を1単位とする大区画を設定し、北東端を基点に西方向へローマ数字I~X、南方向へアラビア数字で1~6と表記している。次に大区画内をそれぞれ100m四方の区画を1単位とした中区画を設定し、北東端を基点とし西方向へ大文字アルファベットでA~Jと、南方向へアラビア数字で1~10と表記した。

今回の西渋田遺跡の調査区は大区画で言えばVIII 5に相当し、中区画ではC 9及びC 10に該当する。また、東渋田遺跡は大区画でVII 5、中区画ではA 8・B 8・C 8・D 8・A 9・B 9・C 9の7区画に及んでいる。調査ではさらに4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の小文字でa~yと、南方向へアラビア数字で1~25と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として4m四方の小区画で行った。



図2 調査地の位置と地区割

第4章 西洪田遺跡の調査成果

調査に当たっては、概述したように土置き場や隣接する畑地等への進入路を確保するため3区画に分割し、西側から順次1区・2区・3区と調査名称を与えた。いずれの調査区も昭和年代に柿畑として利用され、道路建設に伴う買収後の現況は荒蕪地であった。

1. 基本層序と遺構面

基本層序は、大別すれば下記のように4層に分かれる。

第0層：現代の盛土である。

第1層：近現代の耕作土であり、褐灰色～黒褐色の細砂である。

第2層：古墳時代以降の包含層で、灰黄色から黄褐色の細砂である。土師器・須恵器等の土器片が含まれる。また、調査区1区北西部分において、中世以前の整地土層が見られ、灰黄色から黄褐色の細砂から中砂である。

第3層：遺構面の地山である。褐色からにぶい褐色の細砂である。

このうち地山である遺構面の第3層は、調査区西側で標高約51.6m、中央付近で標高約52.0mを測り、東側の3区では標高約51.5mである。また、調査区中央の北側の標高は約51.5mで、地山面は東側から2区南側中央部分にかけて緩やかに上がり、北西方向に向けて緩やかに下る地形と考えられる。第3層の詳細については、にぶい黄褐色の細砂(3a)とにぶい黄褐色の中砂から粗砂(3b)となり、その下層は3cmから10cm大の河原石や礫を多く含む層位(3c)となる。それ以下では3b・3cの良く似た層が交互に見られる。

各調査区の堆積状況については、1区は第1層の近現代の耕作土が堆積し、第2層の弥生時代・古墳時代の遺物包含層である旧耕作土が見られる。この旧耕作土には近世の遺物も少量含まれており、古い遺物を含んではいるが近世の耕作土と判断される。

また調査区北西側にかけて、土師器・須恵器の摩滅した細片を含む層がみられ、上面で瓦器を伴う土坑が検出されたことから、中世以前に整地されたものと考えられる。遺構面は第3層で、主に南側で古墳時代の遺構が検出された。

2区は、調査区北側の通路を造成する際に掘削した第0層である現代の造成土が堆積し、第1層の近現代の耕作土、第2層の遺物包含層が見られる。第3層上面で遺構面が形成される。また、2区の調査区東部の約5mは、通路として一段低くなっており、第1層・第2層がなく、第3層についても削平されている。1区同様、調査区南側を中心に遺構が検出された。

3区は西側で碎石を敷くなど地盤改良がなされていた。第1層はなく第2層が薄く堆積し、その下層の第3層で遺構が検出されている。中央付近から東側においては、第1層の近現代の耕作土が確認でき、第2層の遺物包含層、第3層地山となる。また北東側は斜面となっており、新しい時期に造成を行ったとのことで、遺物はみられるものの、埋土は第1層の現代耕作土である。

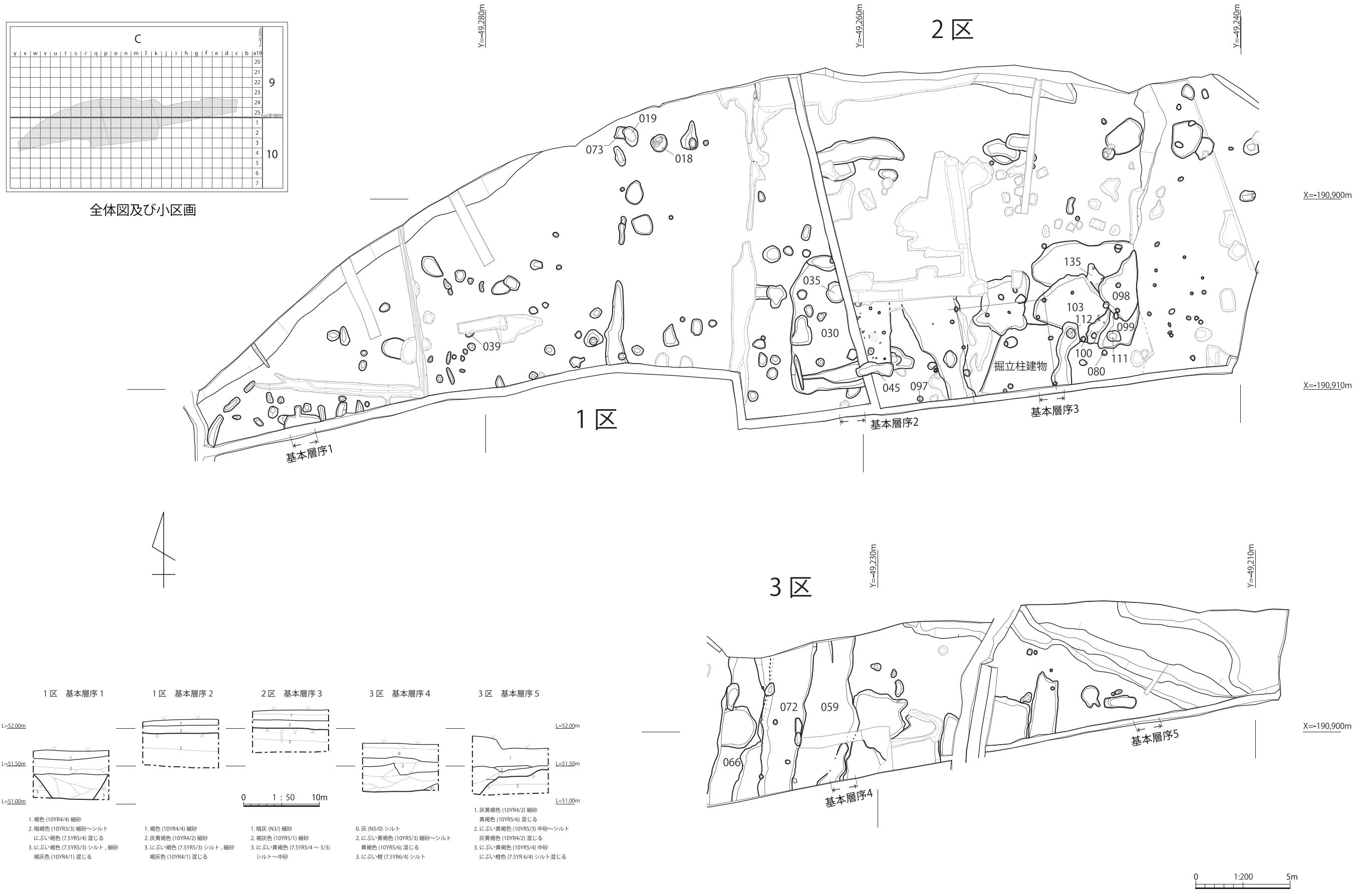


図3 西渋田遺跡全体図及び基本層序

2. 主要遺構

1区の遺構

調査地西側の調査区である。旧耕作土の第2層を除去した第3層上面で遺構検出を行った。調査区の西側から北側にかけては、摩滅した土師器の碎片を含む造成土が確認され、明確な遺構は

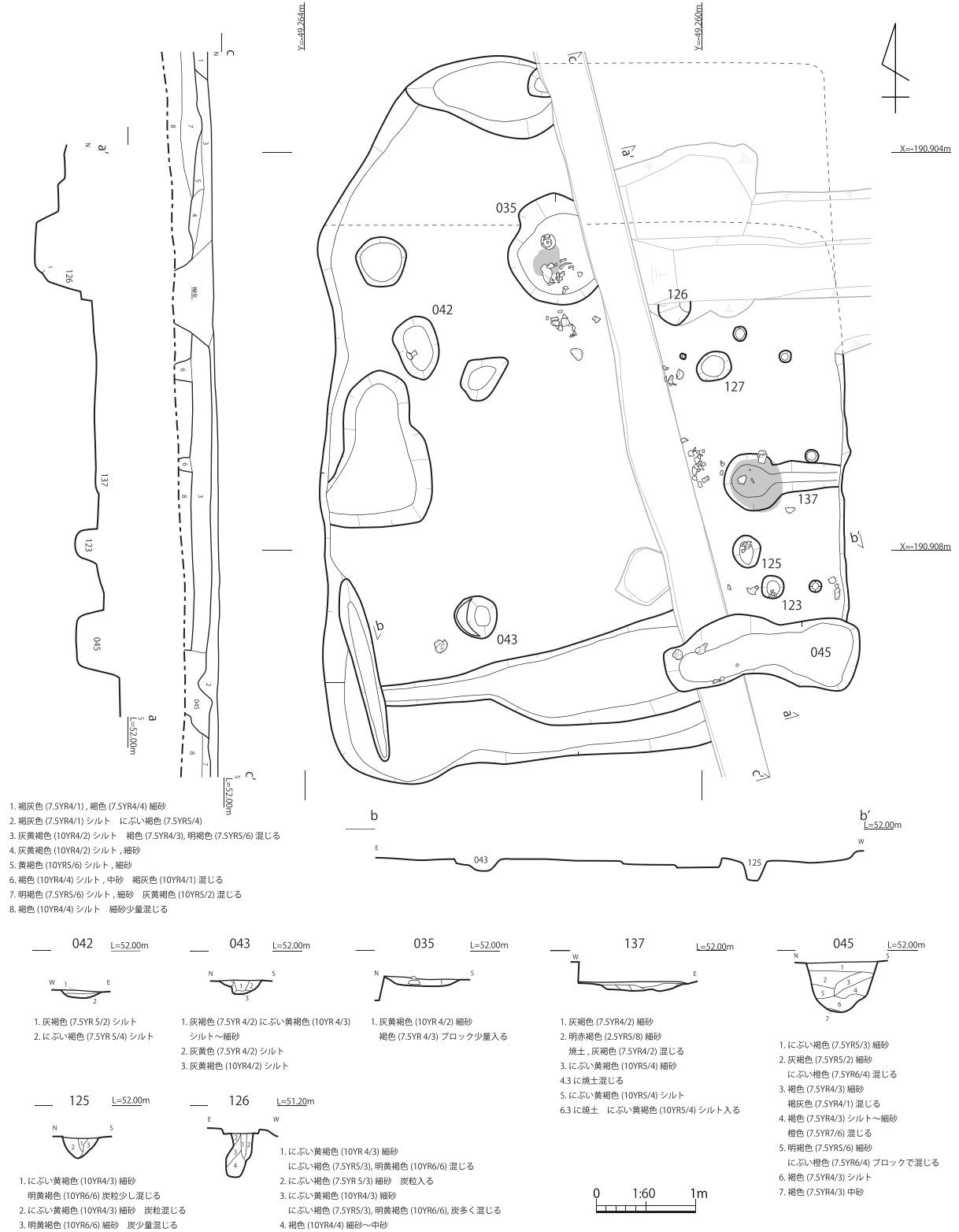


図4 030 竪穴住居平面図・断面土層図

見られないものの、調査区東側の標高がやや高くなる部分で遺構が確認された。検出された遺構は主に古墳時代中期を中心とし、調査区北側の造成された付近では、中世の遺構を検出した。

019 土坑 調査区北東側で検出した。東西約 0.7m、南北約 9.5m、深さは約 0.4mの楕円形を呈している。埋土はにぶい赤褐色のシルト質土で、焼土や炭粒が混ざる。出土遺物は土師器が出土している。019 土坑の下層で検出した遺構から瓦器が出土していることから、中世もしくはそれ以降のものと考えられる。

030 竪穴住居 調査区南東端で西半分を検出し、2区において東半分を検出した。木の根の影響などのため、平面での検出では正確な遺構の肩が検出できなかったものの、土層断面において確認したところ、約 5m の方形の竪穴住居であることが判明した。支柱穴は 041・043 (1区) 126・125 (2区) であり、柱穴間は、約 2.8m である。下記で記す 035 土坑は、竪穴住居に付随するカマドの可能性が考えられる。また、1区で検出した際には、南北方向の広がりが約 7m と認め

られたことにより、竪穴住居が重複している可能性も考えられた。しかし、2区の検出状況から約 5m の方形の竪穴住居と判断し、埋土の土層断面の観察から竪穴住居の肩より北側については、この竪穴住居以前に掘削された遺構と推測される。出土遺物は、土師器の高杯の脚部 (11~13) が出土し、2区の調査区からは短脚の方形一段透かしが施された須恵器高杯 (9) が出土しており、これらの遺物から古墳時代中期に帰属するものと考えられる。

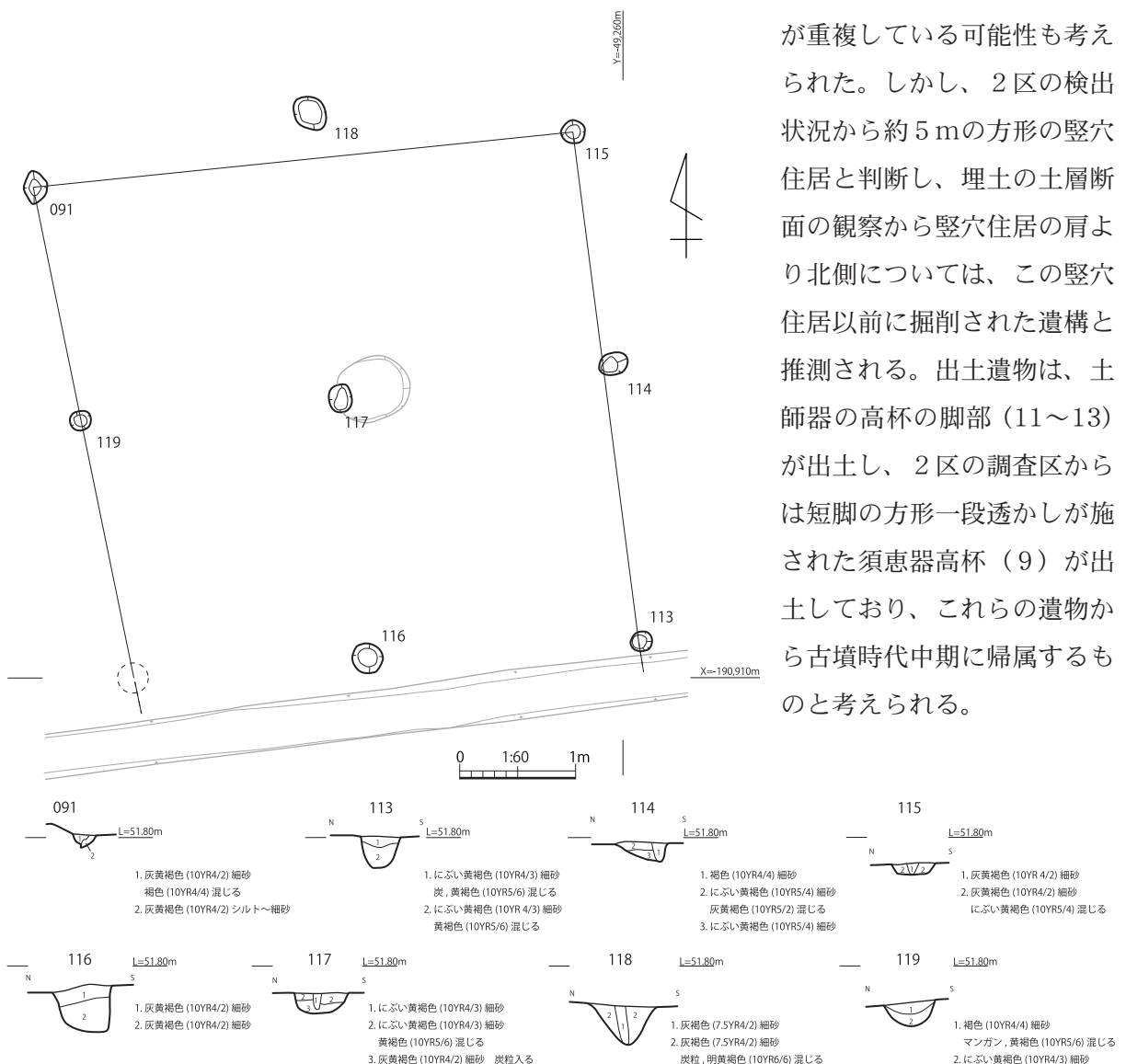


図5 掘立柱建物平面図・断面図

035 カマド 前述の 030 竪穴住居の内検出した土坑で、南北約 1.5m、東西約 0.8m、深さ約 0.1mを測る長楕円形の土坑である。中央部分で土師器の高杯が杯部を伏せた形で検出された。脚部は確認されず、高杯の下で幅約 0.03mの焼土が確認された。その他の出土遺物としては土師器片があり、古墳時代中期のものと考えられる。

045 土坑 調査区南東端で検出した土坑である。南北方向約 0.7 m、東西方向約 2 m、深さ約 0.5mである。030 竪穴住居の南端に位置し、030 より上面から掘削されていることから 030 以後のものであるが、出土した 3 点の土師器の高杯脚部からみるとそれほど時期差はなく、ほぼ同時期のものと考えられる。

ピット 複数のピットを検出した。その配置からは明確な建物跡を確認できていないが、何らかの建造物が存在した可能性が考えられる。埋土は褐灰色とにぶい黄褐色、黄褐色の 3 種類みられ、深さは約 10cmと浅いものが多い。遺物は土師器の細片が出土しているが、時期の特定には至っていない。

2 区の遺構

1 区と同様に南側に遺構が集中して検出された。また調査区東側については近隣住民の通路として使用されており、一段低くなっている。

099 土坑 調査区南側の部分で検出した。幅約 1.5mで東側半分は近隣住民の通路として削平

されていた。深さは約 0.1mである。遺物は、土師器や須恵器が出土している。

100 土坑 099 土坑に切られるようにして検出した。残存幅で約 1m、深さは約 0.2mである。比較的多くの遺物がみられ、土師器や須恵器の壺の口縁が出土している。また、長辺が約 15cmのサヌカイトが出土しており、調整痕が見られスクレイパーと考えられる。

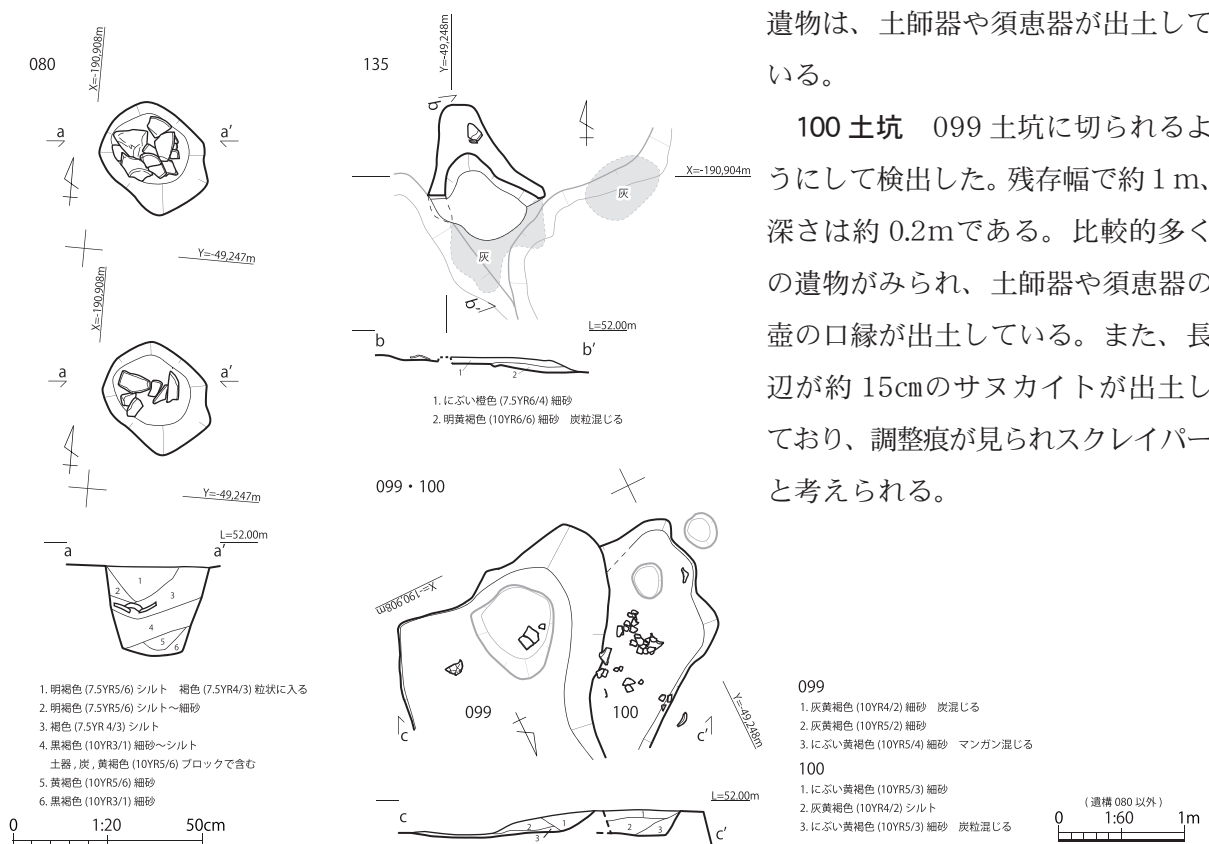


図6 080ピット・135竪穴住居・099土坑・100土坑個別遺構図

080ピット 100土坑の南側で検出したピットで、直径約0.3mで深さは約0.25mである。

中層から土師器と5cm大の石が出土した。土師器は2個体あり、口縁を合わせその上に石を置いていた状態と推測され、地鎮等の祭祀を行ったものと考えられる。周辺にピットは確認されたものの、080と並ぶ明確な建物跡は確認できなかった。

掘立柱建物 調査区南側中央で検出した。規模は東西2間、南北2間を検出したが南側については調査区外となるため、全体の規模は不明である。柱穴の径は0.2m前後であり、深さは確認規模で浅いもので0.1m、深いもので0.3m前後を測る。遺物は、土師器の細片が出土している。

135 竪穴住居 調査区南側で遺構が重なり合う箇所の下層において、カマドを検出した。カマドは北辺の中央に位置していると考えられ、炊口付近では灰が検出され、東側に灰を掻き出している。そのほかの付属施設としては、099土坑の下層で検出した111や112などが貯蔵穴と考えられる。上層の遺構により、竪穴住居の肩が判明していないが、111や112などの位置から推測すると南北方向が約4mのものと推測される。

ピット 調査区東側の一段低くなっている箇所において複数のピットを確認したものの、その配置からは明確な建物跡を確認できていない。埋土は、褐色・褐灰色の細砂で、何らかの建造物が存在した可能性が考えられる。

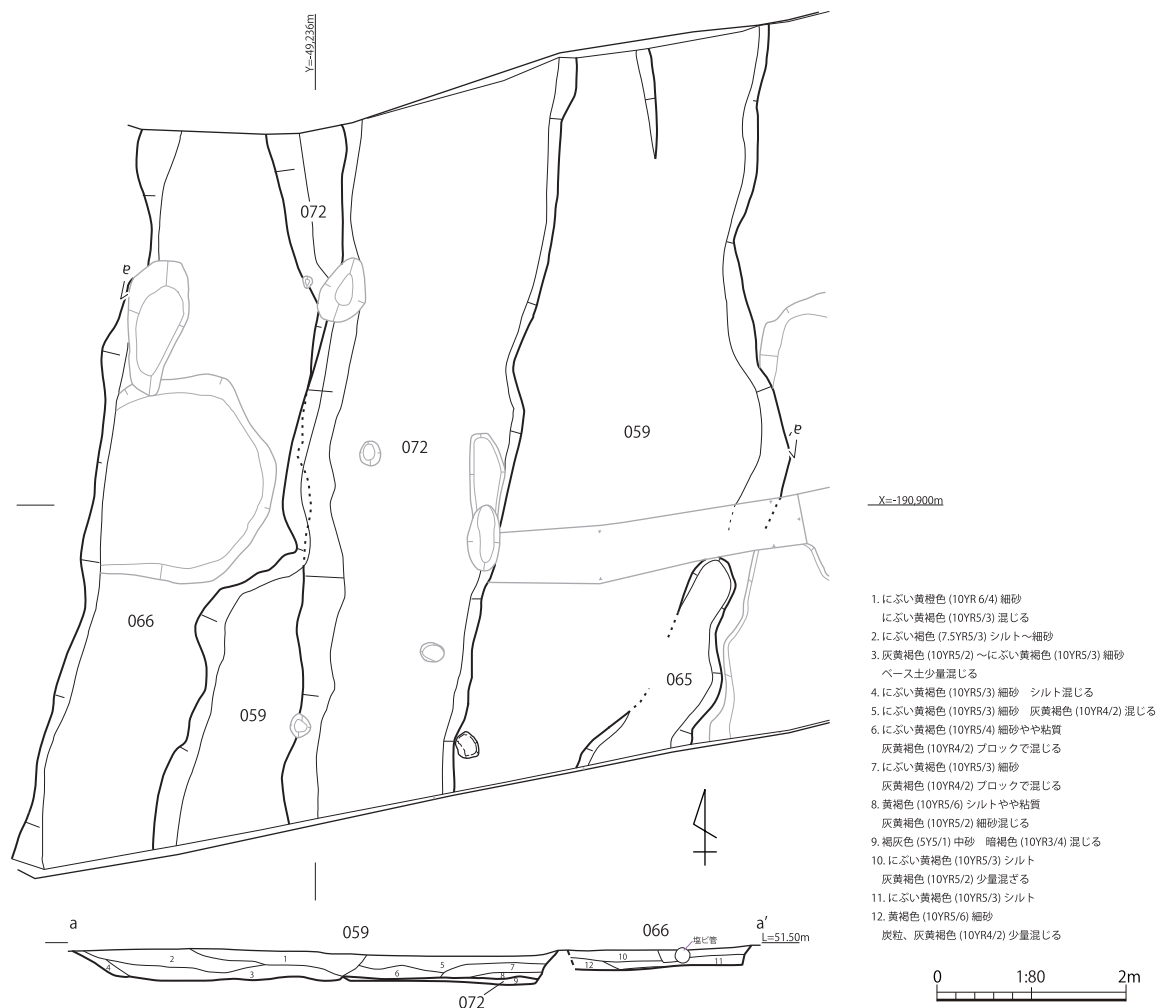


図7 066・059・072 溝平面図・断面図

3 区の遺構

調査地東側の調査区で、北東部分については、近年に造成されたことが、地元の聞き取り調査で判明した。1 区西側の遺構面とほぼ同じ標高の第 3 層上面で検出を行った。

059 溝 調査区の西側で検出した南北方向に流れる溝である。幅約 5 m、深さは約 0.4m を測る。土層断面の観察から複数掘削されたと考えられる。

066 溝 塩化ビニールのパイプの攪乱を除去後、059 溝の西側で検出され、切りあい関係から 066 の方が古い。059 と同方向に流れており、深さは約 0.2m である。

072 溝 059 溝の下層で検出した溝である。残存している幅で約 2 m を測り、埋土は灰黄褐色の粗砂である。深さは約 0.1m で、下層から古墳時代中期の須恵器の杯身が出土している。また 059・066 の溝よりも古いものと考えられる。

その他に出土遺物としては、1 区西側の包含層から弥生土器 2 点、2 区北側の 106 土坑より磨製石斧が 1 点出土している。また、2 区で弥生時代の石鎌 1 点、3 区で縄文時代の石鎌 1 点を表面採取した。

3. 遺 物

【1 区出土遺物】

包含層全体を見ると古墳時代の須恵器杯身・蓋（3・4）などが多く見られるが、近世の伊万里染付け碗（1）などもあきらかに入っている。（5）は弥生土器の広口壺の口縁部であるが、端部を垂下させて作り出した面に竹管文を配したもので、弥生時代中期後葉以降のものと考えている。（6）は先端部と茎部をわずかに欠いているが有茎式の石鎌で、弥生時代中期のものと思われ材質はサヌカイトである。（9）は須恵器の有蓋高杯で短脚部には一段の透かしが施されている。古墳時代中期段階のものと考えている。

土師器の高杯には裾部が屈曲して外側に開くもの（8・12）と脚部が裾部にかけてなだらかに広がっている（7・11）がある。杯部（10・14）について見ると杯部はやや深めの椀形で、口縁部はかすかに外反させている。土師器の壺では、口縁部が外反するタイプ（15・17）とやや内傾気味に立ち上がるもの（18）が認められる。（19）は土師器の鉢の可能性を考えている。口径は 12cm 前後になるものと思われ、内外面とも斜め方向の粗い刷毛調整が施されている。（20・21）はともに小型の壺になるものと思われるが、底部はひしゃげ扁平を呈している。これらの土器（9～22）は、遺構 030 としている竪穴住居から出土しているものであるが、須恵器の高杯も含めて古墳時代中期に帰属するものと言えよう。（24）の弥生土器は底部のみであるが、器形としては甕になるものと思われる。

【2 区出土遺物】

（26・27）は須恵器の蓋である。このうち（26）については稜が認められるものであるが、（27）は天井部から口縁部にかけて丸みを帯びるものであり、前者は 6 世紀前半から中頃にかけてのものであり、後者はこれよりやや新しい時期のものと言えよう。

(28~30) は 045 土坑から出土しているもので、このうち土師器の高杯は、ともに脚部は裾端部に向かって緩やかな曲線を描くタイプである。(30) の礫石器は敲石で石材は砂岩である。(32) の瓦器碗は体部外面にも磨きが施され、高台部も「八」字状に外側に張り出すなど古い要素が看取できるものであり、12 世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。この時期の遺物は少ない状況であった。(35) は小型の甕で、体部外面には横方向の粗いタタキ整形が施されている。

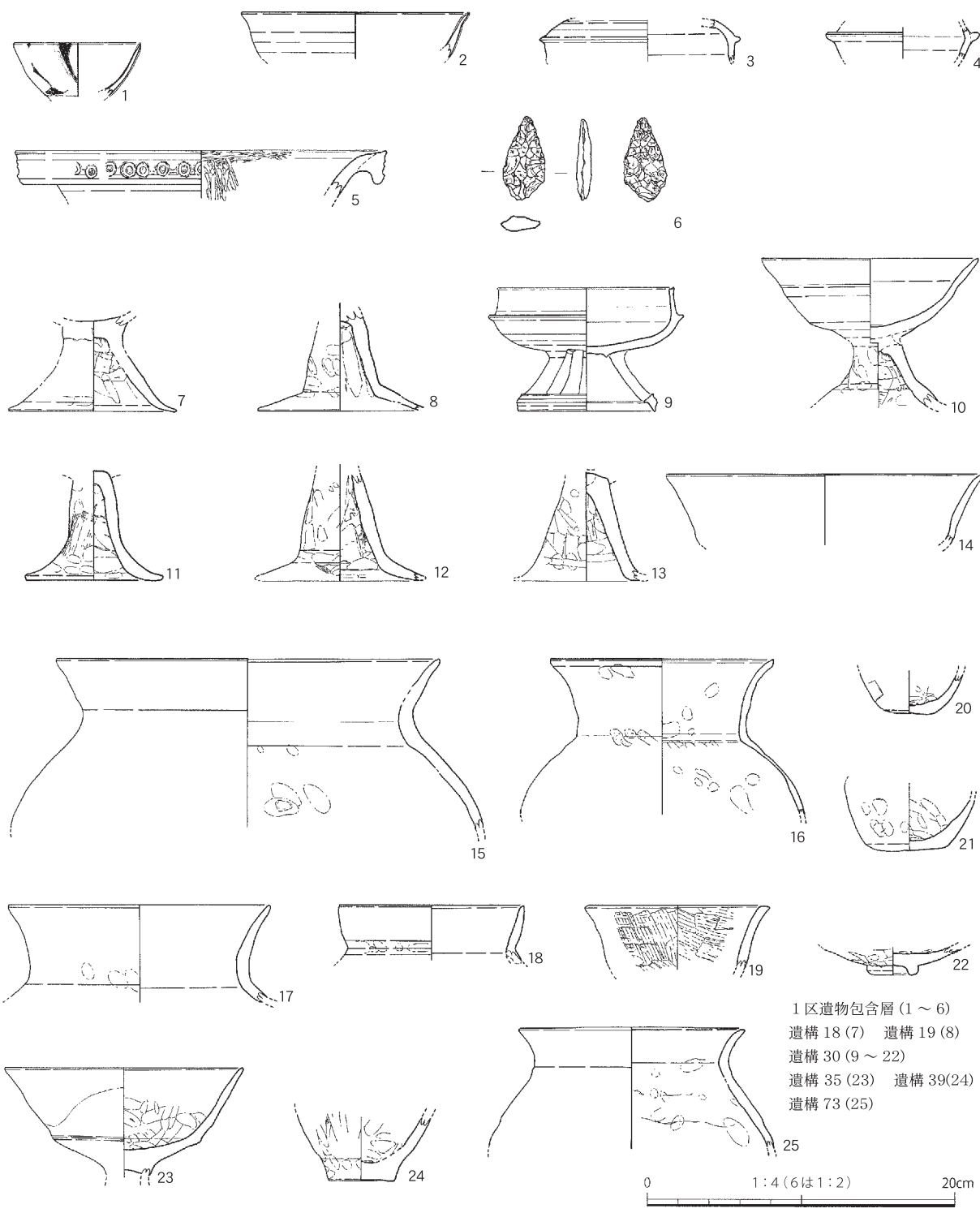


図8 西渋田遺跡出土遺物実測図 (1)

(36) は須恵器の広口壺で、口縁端部を上方につまみ上げて突出させている。全体に灰色を呈する。

(38~45) は 103 土坑から出土しているものである。このうち (38・39) は須恵器の杯身で、立上がり部はほぼ上方に高く立上がった後、端部を丸く収めている。6 世紀前半から中頃にかけてのものと考えられよう。(44・45) は製塩土器である。ともに内外面は橙色を呈するもので、復元口径は 5 cm と 4 cm ほどである。器壁は薄く胴長で、いわゆる丸底 I 式に分類されるタイプで

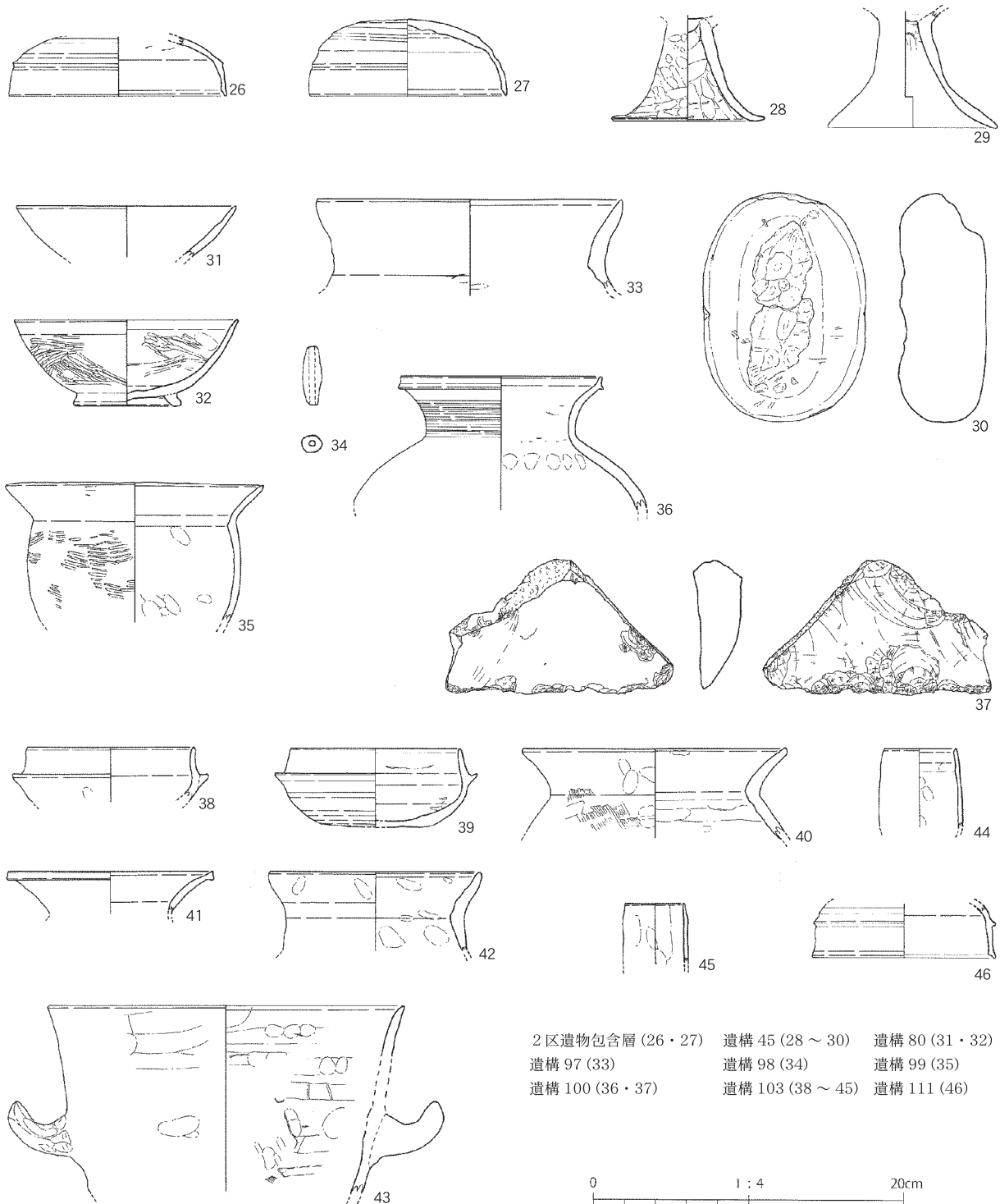


図9 西浜田遺跡出土遺物実測図(2)

ある。時期的には前述の須恵器杯と同じ時期に帰属するものであろう。(43)は土師器の甌で、復元ではあるが口径は23cm弱測るもので、胎土には石英が含まれる。

【3区出土遺物】

(47)は須恵器の杯身である。受け部の張り出しはやや小さいものの立上がり部はわずかに内傾し、高さを保っている。(49)の土師器の甕は、頸部がやや緩やかに屈曲し、口縁端部を丸く収めている。(50)は表面採取した遺物であるが、サヌカイト製の凹基式の石鏃である。(51)の須恵器杯蓋は天井部が丸みを帯びており、口縁部は「ハ」の字に開き、稜はやや鈍くなっている。6世紀中頃に近い製品と考えられよう。(52)は須恵器の直口壺の口縁部である。(54)の土師器の高杯の杯部はやや深手で、体部は外上方伸び屈曲して稜を成し、さらに外反気味に立ち上がっている。(53・55)もともに土師器の高杯である。前者の裾部は脚部からつづくなだらかな曲線を描いているが、後者では、屈曲して接地する形態となっている。(57)は土師器の壺である。口径は10cm足らずで胴部もやや狭まる形状をしており、小型の壺になるものと思われる。

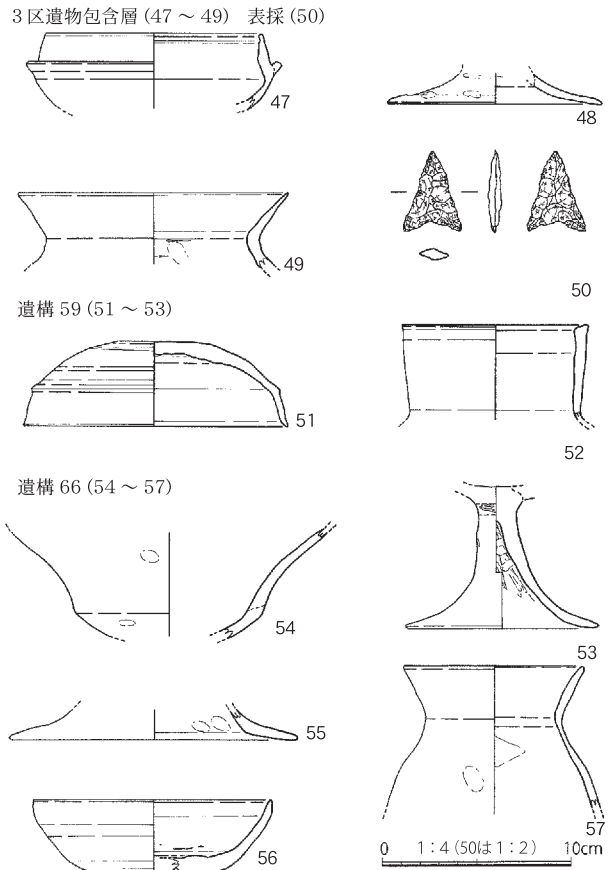


図10 西渋田遺跡出土遺物実測図(3)

4. まとめ

弥生時代 1区において包含層中から弥生時代後期の壺の口縁が出土し、2区では表面採取で石鏃が見つかったが、遺構に伴って出土しておらず、明瞭な弥生時代の遺構は確認できなかった。

古墳時代 1区と2区にまたがり方形の竪穴住居跡を検出した。東辺部の肩と土層断面から約5mの方形の竪穴住居と考えられる。また支柱穴間が約2.8mで、焼土を伴う土坑がカマドと推察され、北辺中央カマドを持つものと推測される。また2区東側でカマドを検出し、後世の掘削により竪穴住居の平面は不明であるが、北側で検出した一部からみると約4mの規模の竪穴住居と推測される。3区においては、ほぼ真北に向かい延びる溝を数条検出した。幅約5mのものもあり何度か掘削されている。下層で検出した溝については、須恵器の杯身が出土しており、古墳時代中期と考えられる。

なお、今回の調査では、古代の遺構及び遺物は確認することができなかった。

第5章 東洪田遺跡の調査成果

調査区名は、図11に示すように1～9区を使っており、各区に3-1、3-2といった枝番を付して細分し、全体を4回の工程にわけて調査を実施した。その工程の組み合わせは【1-1区・2区】【1-2区】【3-1区・4-2区・5-1区・7-2区・8区・9区】【3-2区・4-1区・5-2区・6区・7-1区】である。

1. 1・2区の調査及び遺構

調査区1・2は、大門橋南口から南へ延びる旧高野街道をはさんだ西側地域にあたる。1区の東端と西端では、40cmほどの高低差があり、西側に向かって低くなっている。また、調査区の南北でも30cmほどの高低差があり、これらの比高差は現況では耕地を区画する段差となっている。

1区の基本層序は、第1層が現代の耕作土、第2層が旧の耕作土で、明瞭な包含層である第3層は存在せず、その下は3cm前後の礫を多く含むにぶい黄色細砂ないし明黄褐色のシルト質の土であった。この面で遺構が検出されており、この層を第5層としている。なお、旧耕作土としている第2層から量的には少ないが瓦器片や青磁片など中世でも前半期の遺物が出土しており、それ以降の遺物が認められない状況であることから当該地の耕地の開発がその時期にまで遡る可能性も考えられよう。

2区の基本層序は第1層が現代の耕作土で、ここでは第2層としている旧耕土は認められなかった。おそらく新しい時期に削平を受けたものと考えられる。第1層の直下には第3層としている褐灰色シルト層の包含層が存在した。この包含層には弥生及び古代・中世と思われる土器が混在したかたちで出土している。ただしその量は少なく、またこの包含層自体も2区全体に存在するものではなく、南西側で厚く、北及び東側にゆくにつれ薄くなり北端では消滅していた。遺構が検出されたのは、この包含層を除去した第5層としている浅黄色シルトの上面である。

1区の遺構

8土坑 1区の西北隅近くで検出した土坑で、長軸0.9m、短軸0.6mほどの楕円形を呈するもので深さは約0.3mを測る。埋土は上層が褐灰色シルト(10Y1/4)、下層に0.1mほど浅黄色粗砂礫(2.5Y7/3)が堆積していた。

10土坑 直径0.8mほどの円形の土坑である。逆円錐状に掘られ

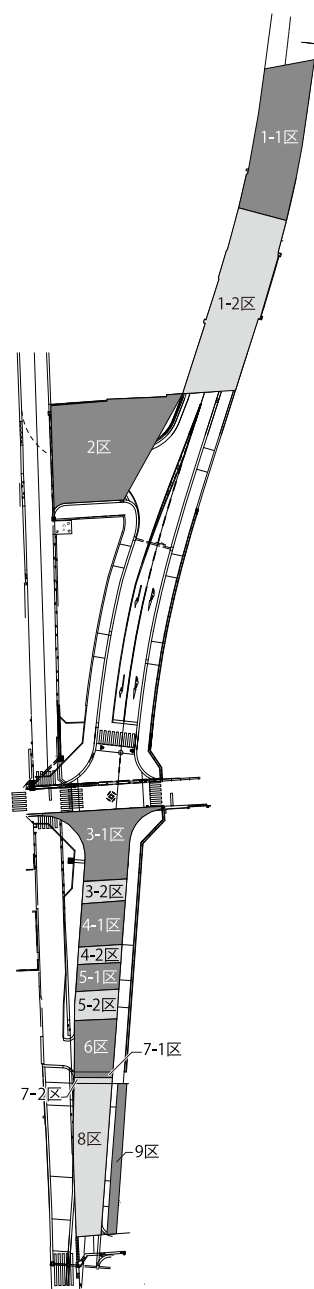


図11 東洪田遺跡調査区

ており、埋土は一層で褐灰色シルト（10Y1/4）により埋まっていた。この土坑からは、極小の土師器片が出土している。

22 土坑 調査区の北側、一段下がったところで検出された土坑で、長軸 1.8m、短軸 1.0mほどの不正形な楕円形を呈するもので深さは約 0.3mを測る。上層の褐灰色シルト（10Y1/4）には 15cm 大の角礫が混入している。下層には薄く浅黄色粗砂礫（2.5Y7/3）が堆積していた。

23 土坑 調査区の北端にひっかかる形で検出したもので、全体は不明であるが幅 0.8m以上を測る。深さは約 0.4mで、10cm前後の石を含む褐灰色シルト（10Y1/4）により埋まっていた。この土坑からは瓦器碗の小片が出土している。

26 土坑 直径 0.8mほどの円形状の土坑である。深さは約 0.3mを測る。埋土は一層で褐灰色シルト（10Y1/4）により埋まっていた。

53 土坑 長軸 1.2m、短軸 0.9mほどの楕円形を呈するもので深さは約 0.3mを測る。埋土は上層 0.1mほどが褐灰色シルト（10Y1/4）、下層は小礫を含む灰色粗砂（5Y5/1）が堆積していた。ただし、この下層の土については第 5 層の下に出てくる土と同じことから掘り過ぎてしまった可能性が高く、本来の土坑の深さは 0.1mほどの深さであったものと思われる。

60 土坑 長軸 1.5m、短軸 0.7mほどの楕円形を呈する土坑である。深さは約 0.1mを測り、褐灰色シルト（10Y1/4）により埋まっていた。

そのほか調査区内では径 0.3m前後、深さ 0.2m前後の柱穴と思われる遺構を 50 基ほど検出しているが、出土遺物はほとんど検出されておらず、時期については明らかにし難い。また、具体的な建物を復元するにも至っておらず、その全容は不明と言わざるを得ない状況であった。

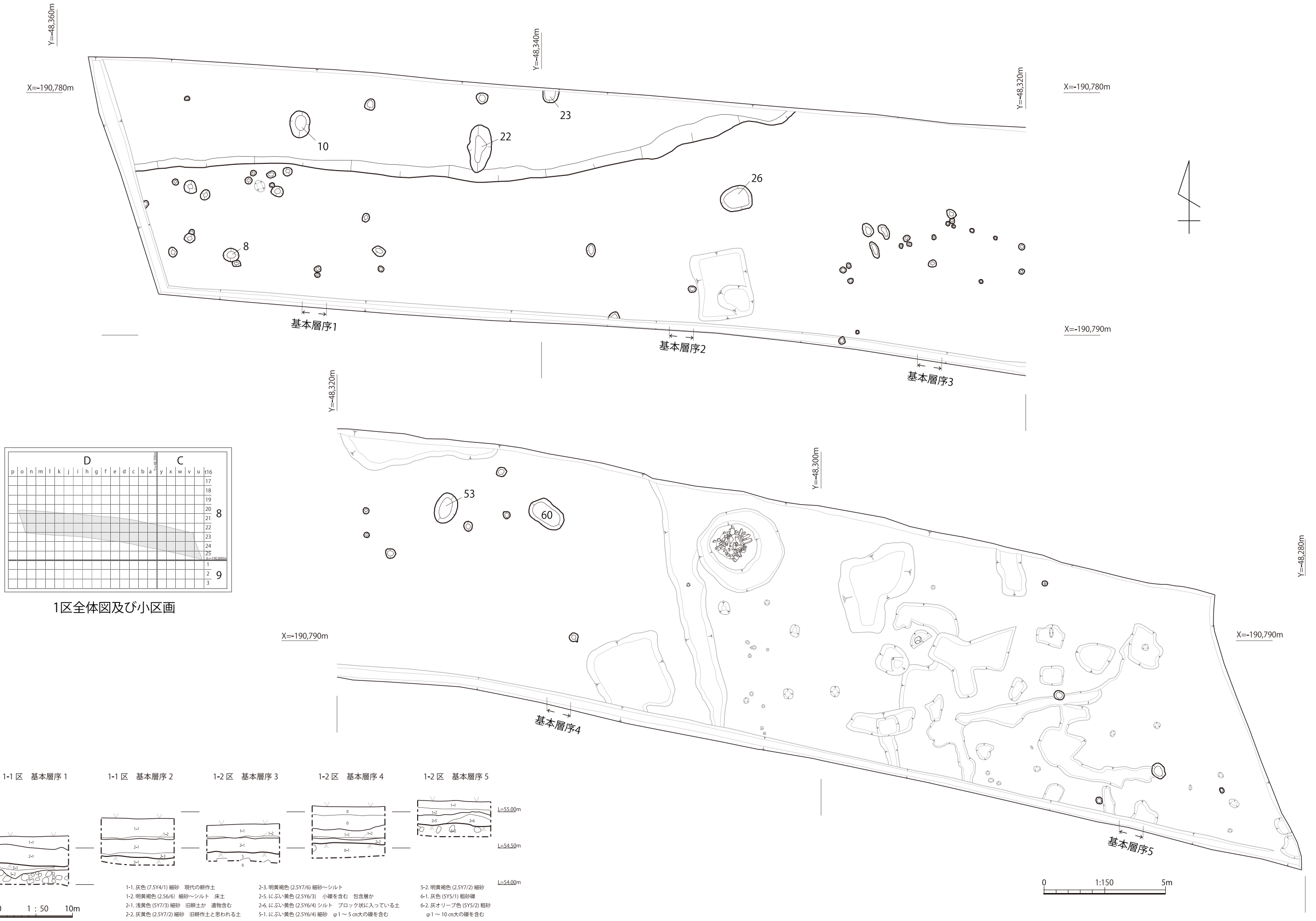
2 区の遺構

263 土坑 調査区のほぼ中央付近で検出した土坑で、長軸 1.7m、短軸 0.7mほどの楕円形を呈するもので深さは約 0.45mを測る。埋土は上層が褐灰色シルト（10Y4/1）、中層は灰黄褐色シルト（10YR4/2）、下層には上層と同じであるが少し砂礫の混じった土が堆積していた。この土坑からは土師器片と思われる遺物が少量ながら出土している。

264 土坑 前述の 263 に切られている土坑であることから出土遺物はないものの弥生時代かそれ以前のもの判断できる土坑である。規模は、長軸が推定で 1.2m前後、短軸は 0.8mを測るやや不正形な楕円状を呈する。深さは 0.25mほどと浅く、褐灰色シルト（10Y4/1）、灰黄褐色シルト（10YR4/2）などの土が入り組んだ形で堆積していた。

315 土坑 調査区の西側で検出した土坑で、長軸 1.6m、短軸 0.7mほどの楕円形を呈するもので深さは約 0.5mを測る。埋土は上層が褐灰色シルト（10Y1/4）、下層には地山の土とよく似た灰黄色シルト（2.5Y6/2）が薄く堆積していた。

この 2 区においても径 0.3m前後、深さ 0.2m前後の柱穴と思われる遺構を 100 基以上検出しているが、1 区と同様にその時期・性格については不明と言わざるを得ない。



1区全体図及び小区画

- 1-1. 灰色 (7.5Y4/1) 細砂 現代の耕作土
- 1-2. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 細砂～シルト 床土
- 2-1. 浅黄色 (5Y7/3) 細砂 旧耕土か 遺物含む
- 2-2. 灰黄色 (2.5Y7/2) 細砂 旧耕作土と思われる土
- 2-3. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細砂～シルト
- 2-5. にふい黄色 (2.5Y6/3) 小礫を含む 包含層か
- 2-6. にふい黄色 (2.5Y6/4) シルト ブロック状に入っている土
- 5-1. にふい黄色 (2.5Y6/4) 細砂 φ1～5cm大の礫を含む
- 5-2. 明黄褐色 (2.5Y7/2) 細砂
- 6-1. 灰色 (5Y5/1) 粗砂礫
- 6-2. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗砂 φ1～10cm大の礫を含む

図12 東浜田遺跡（1区）全体図及び基本層序

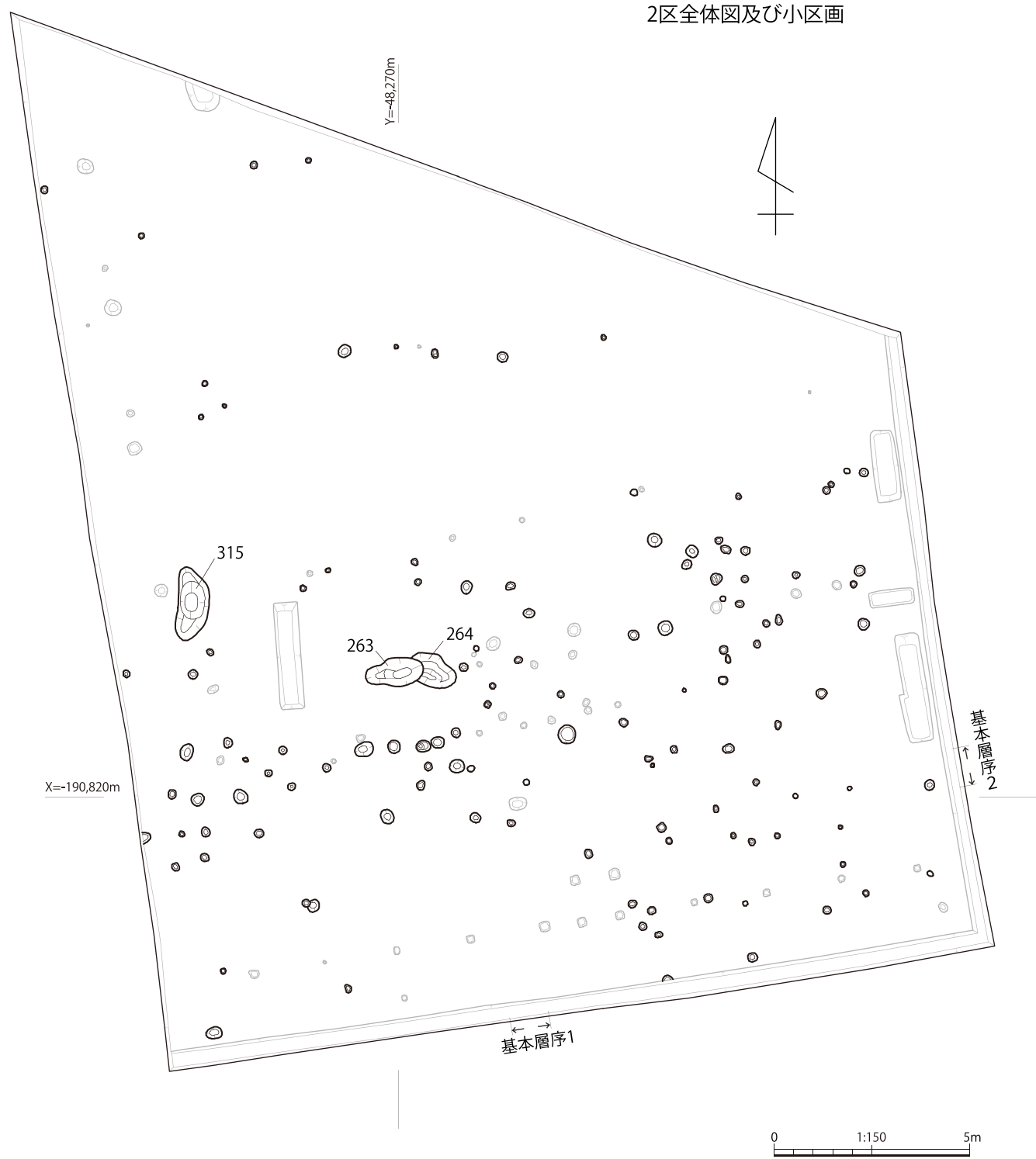
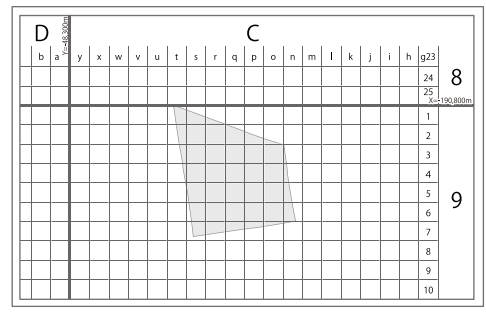
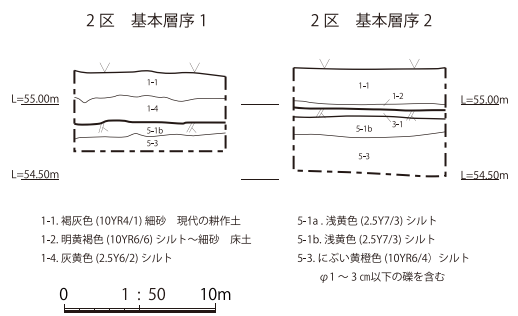


図13 東渋田遺跡（2区）全体図及び基本層序

2. 3～9区の調査

当該地の現況は宅地跡及び駐車場であるが、それ以前、現在の道路（和歌山橋本線）ができるまでは、水田として利用されていたようで、道路の敷設後、この道路面の高さまで1m近く盛り土により嵩上げし、そこに家を建てていたことが調査区の壁面観察の結果判明している。

全体を通して見ると4区を境に西側と東側とでは様相が大きく異なる。この4区の西側近くで新しい時期の水田を区画する南北方向の石垣を検出した。この石垣を挟んで西側は0.4mほど低くなっている。おそらく水田を造るに当たって西側部分は削平を受けたものと考えられる。また、ここより西側は家が2回にわたって建て替えられていたようで、家の基礎等による攪乱が著しい状況でもあった。こうしたことから西側部分については、検出された遺構はすくない。これに比べると東側の5～9区においては遺構密度が高く、竪穴住居などの遺構が検出されている。

この付近の基本層序は、先に述べた家を建てるために嵩上げた土（宅地造成土）を第0層としており、この土は場所によっては厚さ1mにも及ぶ。その下は近現代以降の耕作土（床土も含む）で、これを第1層としている。第2層は浅黄色ないし灰黄色を呈するシルト質の土で、この層については近世あるいはそれ以前の旧耕作土の可能性はある。第3層は明黄褐色の土で粒状の鉄分を含む。この第3層がベースとなるもので、この上面で遺構を検出している。

以下、各区ごとに主要な遺構についてその概略を記すこととする。

3区の遺構

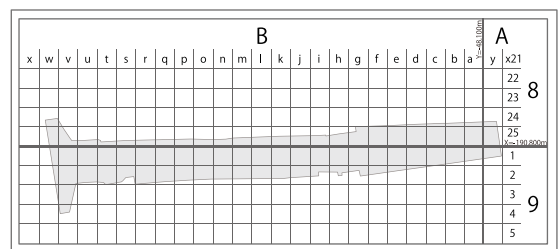
330 溝 3区の西端から東へ延び、その後緩やかに屈曲して北方向へと延びる溝である。幅はもっとも広いところで2.1m、狭いところで1.5mほどを測る。深さは0.3mほどで、上層には暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）、中層には黒褐色シルト（2.5Y3/2）、下層には黄褐色シルト（2.5Y5/3）がレンズ上に堆積していた。弥生時代中期前葉と思われる壺の大振りの破片が、溝底部よりわずかに浮いた形でまとまって出土している。この溝については、何かを圍繞するように屈曲していることや時期的なことから方形周溝墓の溝である可能性が考えられよう。

328 土坑 前述の330溝のすぐ北側で検出した土坑で、径0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は上層がにぶい黄褐色シルト（2.5Y6/4）、下層にはよく似た黄褐色シルト（2.5Y6/3）が堆積していた。

4区の遺構

4026 竪穴住居 調査区の西側寄りの前述の水田区画の段差をなすところで、この段差により炉跡も含めて住居の西側の過半分は削平を受けた模様で残っていない。また、北東部はいくつかの攪乱により削り取られている。このため遺存していたのは南東部の1/4足らずということになる（図版14上参照）。わずかに遺った弧の大きさから復元すれば直径5.5m前後の規模になるものと推定される。残存する深さは6cmほどであることから、かなり後世に削られていることがわかる。埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト一層であった。

404 土坑 長辺1.5m、短辺0.9mほどのやや歪な長方形の土坑で、深さは0.2mほどと比較



3~9区全体図及び小区画

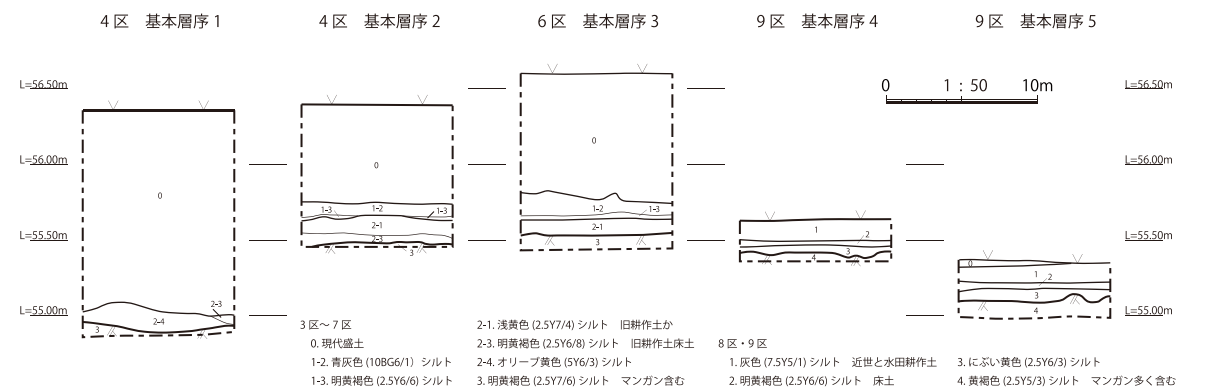


図14 東渋田遺跡 (3区~9区) 全体図及び基本層序

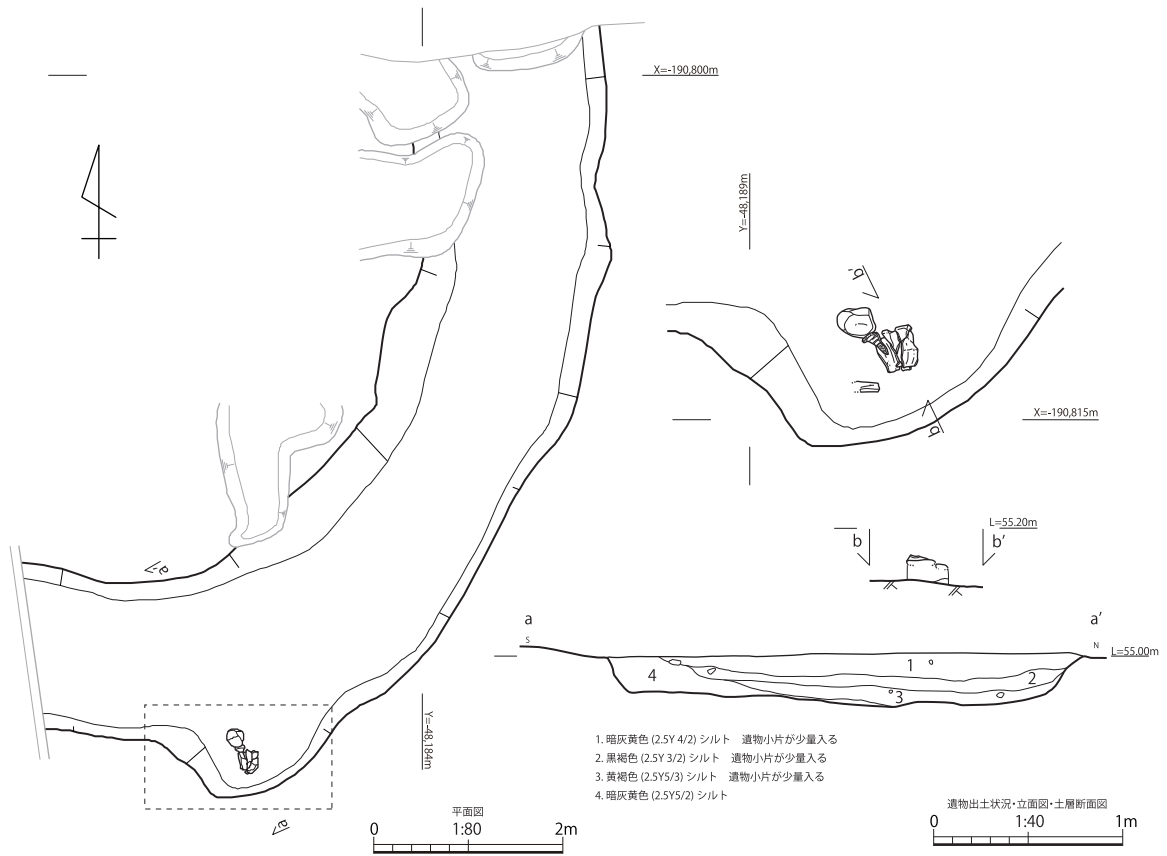


図15 330 溝平面図・断面図

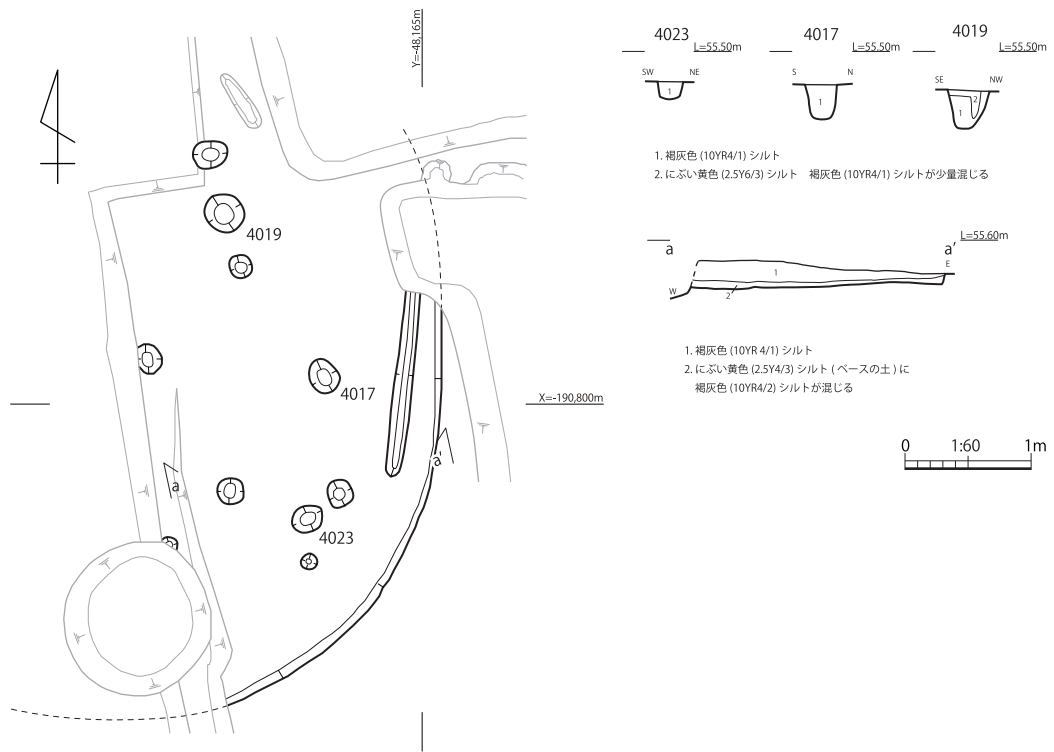


図16 4026 竪穴住居平面図・断面図

的浅い。埋土は上層が褐灰色シルト（10YR4/1）、下層には灰黄褐色シルト（10YR4/2）が堆積していた。少量だが弥生土器が出土している。

406 土坑 検出区北側で検出した土坑で、さらに北側の調査区外に延びていくため、全容については不明だが、確認規模で長軸 1.7m以上、短軸 1.5m以上を測る比較的大きな土坑である。深さは最深部で 0.6mほどを測る。上層には褐灰色シルト（10YR5/1）が 0.1mほど、その下には 0.5mほどの厚さで褐灰色シルト（10YR4/1）が堆積していた。なおこの中には薄く炭層がはいっていたことも確認している。弥生土器が出土している。

4013 土坑 長軸 1.9m、短軸 1.3mほどの楕円形を呈するもので深さは約 0.40mを測る。埋土は褐灰色シルト（10YR4/1）一層で、この中から弥生土器片が多く出土しており、とくに南西部の肩付近には大振りの破片がかたまって出土している。

4014 土坑 4026 堅穴住居の南東側で検出した土坑で、南側の調査区外に延びて行くため全容は不明だが、幅約 1.3m、長さ 1.5m以上を測る。深さは 0.3m弱である。埋土は褐灰色シルト（10YR4/1）が上層に厚く堆積し、下層には灰黄褐色シルト（10YR4/2）及びこの土と明黄褐色シルト（2.5Y7/6）の混在した土が薄く堆積していた。この土坑からは弥生土器片が出土している。

5 区の遺構

501 土坑 調査区北側で検出した土坑で、さらに北側の調査区外に延びていくため、全容については不明だが、長軸 3.0m、短軸 2.0mほどの比較的大きな土坑となるものと思われる。深さは最深部で 0.6mほどを測る。二段落ちの土坑で、上層には褐灰色シルト（10YR5/1）が、下層

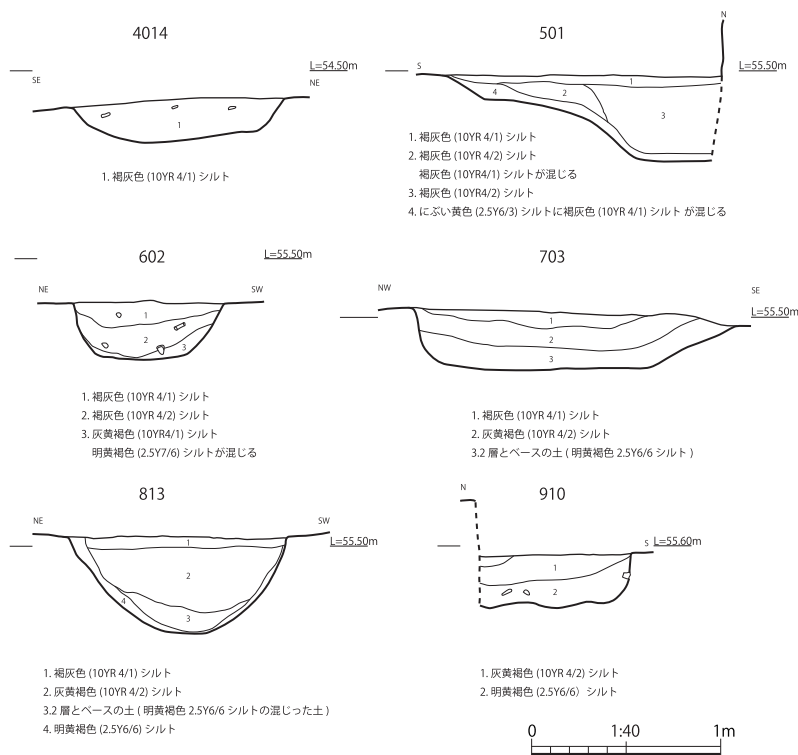


図17 4～9区個別遺構断面図

には灰黄褐色シルト（10YR4/2）が堆積していた。この埋土からは弥生土器片が比較的多く出土している。

510 土坑 幅 0.5m、長さ 3.0mほどの細長い溝状の土坑である。深さは 0.2mほどと浅い。埋土は上層には褐灰色シルト（10YR5/1）が、下層には灰黄褐色シルト（10YR4/2）がレンズ状に堆積していた。

536 土坑 幅 0.7m、長さ 2.0mほどの不整形な土坑で、深さは 0.3mを測る。埋土は一層で褐灰色シルト（10YR5/1）が堆積していた。

6 区の遺構

601 土坑 最大幅 1.0m、長さ 3.0mほどの細長い土坑で、深さは 0.3mほどを測る。埋土は 3 層で、上層から褐灰色シルト (10YR4/1)、灰黄褐色シルト (10YR4/2)、褐灰色シルト (10YR5/1) が 10cmほどずつレンズ状に堆積していた。

602 土坑 前述の 601 土坑のすぐ南西側で検出した土坑で、幅 0.7m、長さ 1.7mほどを測り、深さは 0.3mほどである。埋土は上層に褐灰色シルト (10YR4/1)、中層に灰黄褐色シルト (10YR4/2) が堆積し、最下層には、褐灰色シルト (10YR5/1) と明黄褐色シルト (2.5Y7/6) の混在した土が薄く堆積していた。中層から弥生土器片と思われる遺物が少量出土している。

632 土坑 一辺 1.8mほどの隅丸方形に近い土坑であるが、南西隅が窪んで、やや歪な形状をなしている。深さは 0.15mほどと浅く、底面は平らとなっていた。埋土も一層で灰黄褐色シルト (10YR4/2) により埋まっていた。

633 土坑 調査区の北側に延びておりその全容については不明であるが、2.1m×2.5m以上の方形を呈する比較的大きな土坑であるが、深さは 10cm前後と浅い。埋土は褐灰色シルト (10YR4/1) 一層であった。

7 区の遺構

701 土坑 直径 0.9mほどの円形に近い土坑である。深さは浅く、10cmにも満たない程度で、にぶい黄色シルト (2.5Y6/3) が堆積していた。出土遺物は確認していない。埋土の土が他の土坑と大きく異なっていることから弥生時代以降の比較的新しい時期のものである可能性がある。

703 土坑 幅 1.8m、長さ 3.0m以上を測る土坑で、深さは 0.3mほどである。埋土は上層に褐灰色シルト (10YR4/1)、中層に灰黄褐色シルト (10YR4/2) が堆積し、最下層には、褐灰色シルト (10YR5/1) と明黄褐色シルト (2.5Y7/6) の混在した土がそれぞれ 10cmほどの厚さで堆積していた。この土坑からは弥生土器片が出土している。

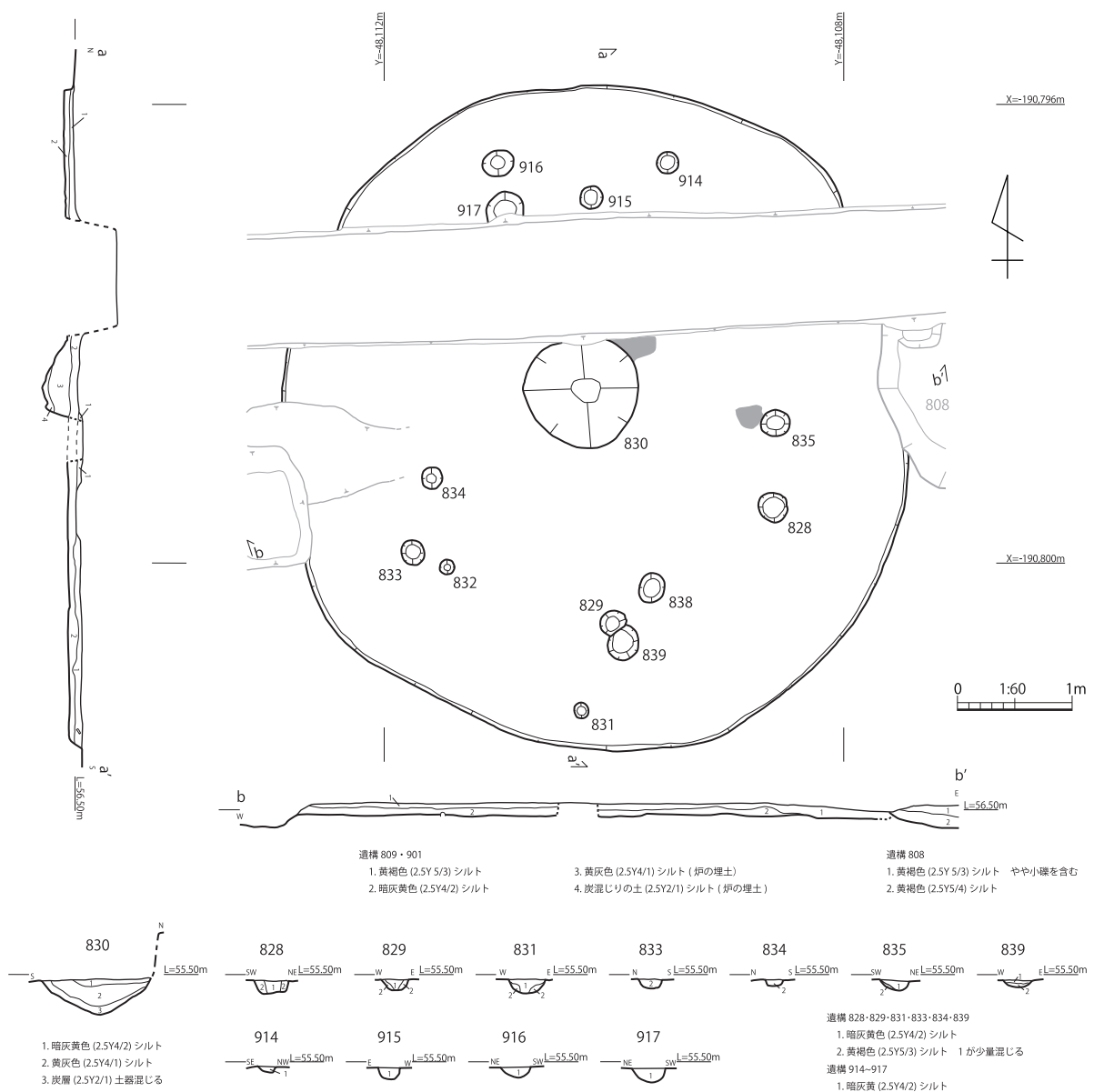
8・9 区の遺構

809 竪穴住居 8 区から 9 区にまたがって検出された竪穴住居である。東側と西側の一部が他の遺構及び攪乱により破壊されているが、ほぼ全容のわかる状態で検出している。それによれば円形の竪穴住居であるが、南北 5.75m、東西 5.40mほどで、やや南北に長くなっている。深さは検出面から 0.1mと残りの悪い状況であった。床面中央やや北側よりで炉跡を検出した。炉は 1 m弱の円形で、深さは 0.3m強を測る。埋土は上層に暗灰黄色シルト (2.5Y4/2)、中層に黄灰色シルト (2.5Y4/1)、最下層には厚さ 6 cmほどの炭層が確認できた。かつらぎ町域では炉の周囲が一段高くなった状況、いわゆる炉堤を伴うものがいくつか知られているが、この炉については炉堤は確認できなかった。なお、壁溝についても確認されていない。柱穴と思われる遺構については、床面で径 0.2m前後のものをいくつか検出しているが、このうちのどれらが主柱穴であったのかは判然としない状況である。出土遺物はきわめて少なく、細片であるため時期を決定するには躊躇されるが、周辺の同じような埋土で埋まっていた複数の遺構から弥生時代中期前半の遺物が出土しており、おそらくこの竪穴住居についてもこの時期のものである可能性が高いものと

考えている。

813 土坑 調査区外の南側に延びていくため全容については不明だが、おそらく長軸 1.6m、短軸 1.2mほどの楕円形を呈する土坑になるものと思われる。深さは比較的深く約 0.5mを測る。埋土は3層に文層でき、上層に褐灰色シルト (10YR4/1)、中層に灰黄褐色シルト (10YR4/2) が堆積し、下層には、中層の土とこのあたりのベースの土である明黄褐色シルト (2.5Y6/6) の混在した土が堆積していた。この土坑からは弥生土器片が多く出土している。

910 土坑 9区の北側で検出した土坑で、調査区外に延びていっているため全容については不明であるが、一辺 2.0m以上の比較的大きな土坑になるものと思われる。深さは 0.35mを測る。壁がほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦であった。



3. 遺物

【1・2区出土の遺物】

1区及び2区については、遺物包含層が削られ薄かったことや遺構密度も低く、これに連動して出土遺物もきわめて少ない状況であった。

(58)は弥生土器の直口壺の口縁部になるものと思われる。口縁端部近くに二条の凹線が巡り、竹管による刺突文が施されている。(59)は瓦器の椀である。暗文は体部内面にのみ施されている。外面下半部には指頭圧痕が明瞭にのこっている。(60)は瓦質のすり鉢である。体部外面は粗い横及び斜め方向のケズリを施し、内面は横方向のナデを施した後すり目を入れている。15世紀代の製品である。(61)は中国製の青磁碗で、片切彫りによる連弁を文様として施しており、前述の瓦器椀とほぼ同時期、13世紀代のものと言えよう。(63)は縄文時代晩期の突帯系土器の深鉢で口縁部に一条の突帯が巡る。胎土は粗く1～3mm大の石英を多量に含む。

【3～6区出土の遺物】

(64～66)は遺構330としている方形周溝墓と考えている溝から出土したものである。いずれも弥生時代中期前半段階に帰属する時期のものと考えている。このうち(66)は広口壺で、口縁端部には刻目が、頸部にはナデの後、櫛描文が施されている。櫛描文は単位幅1cmほどであり、1単位9本となっている。(67・68)はともに弥生土器の甕もしくは壺の底部である。前者は平底となっているが、後者はやや上げ底気味の底部である。(70・71)は弥生土器の甕の口縁部である。このうち(70)は頸部から口縁部にかけて外反し、端部をかすかに垂下させている。(72)は弥生土器の細頸壺で、口縁部下に一単位7本の櫛描きによる粗い波状文が施されている。(73)は口径10cmほどで、小型の甕になるものと考えている。(74)は細頸壺の口縁部で端部をかすかに上下に肥厚させ端面を作り出している。(75・76)は壺、甕の底部であるが、76の甕は紀伊形甕と言われるタイプになるものと思われる。(77)は広口壺の頸部分であるが、66と同様の櫛描文が施されている。(78)は壺の口縁部で、ほぼまっすぐ立ち上がった後、口縁端部

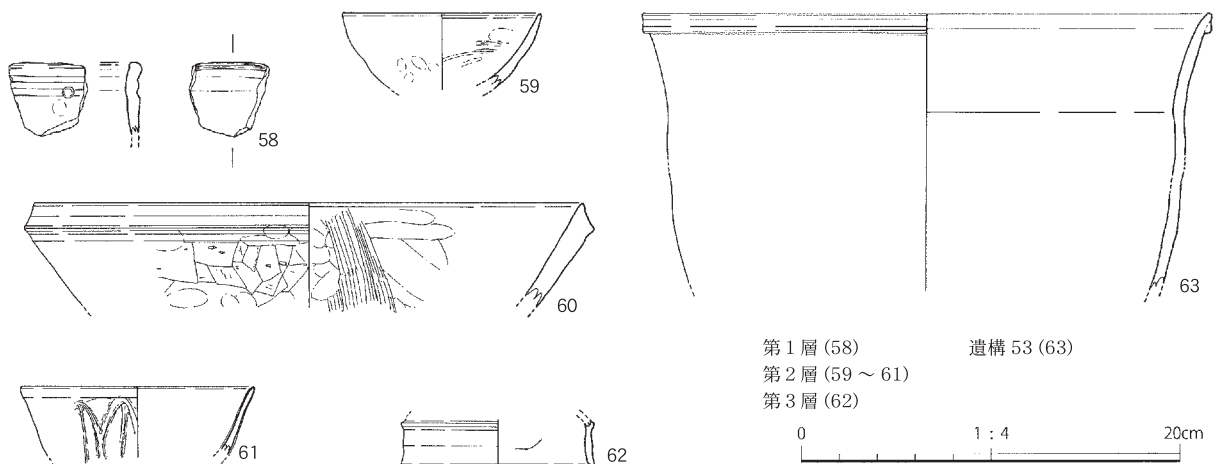


図19 東渋田遺跡出土遺物実測図(1)

をヨコナデにより調整している。(81)も弥生土器の長頸壺となるものと思われる。口縁部は外反気味に開き、内面にはユビオサエ痕がかすかに残っている。(82)は壺の体部で、体部外面にかすかに2ないし3本単位の櫛描きによる波状文が認められる。胎土に雲母が含まれており、

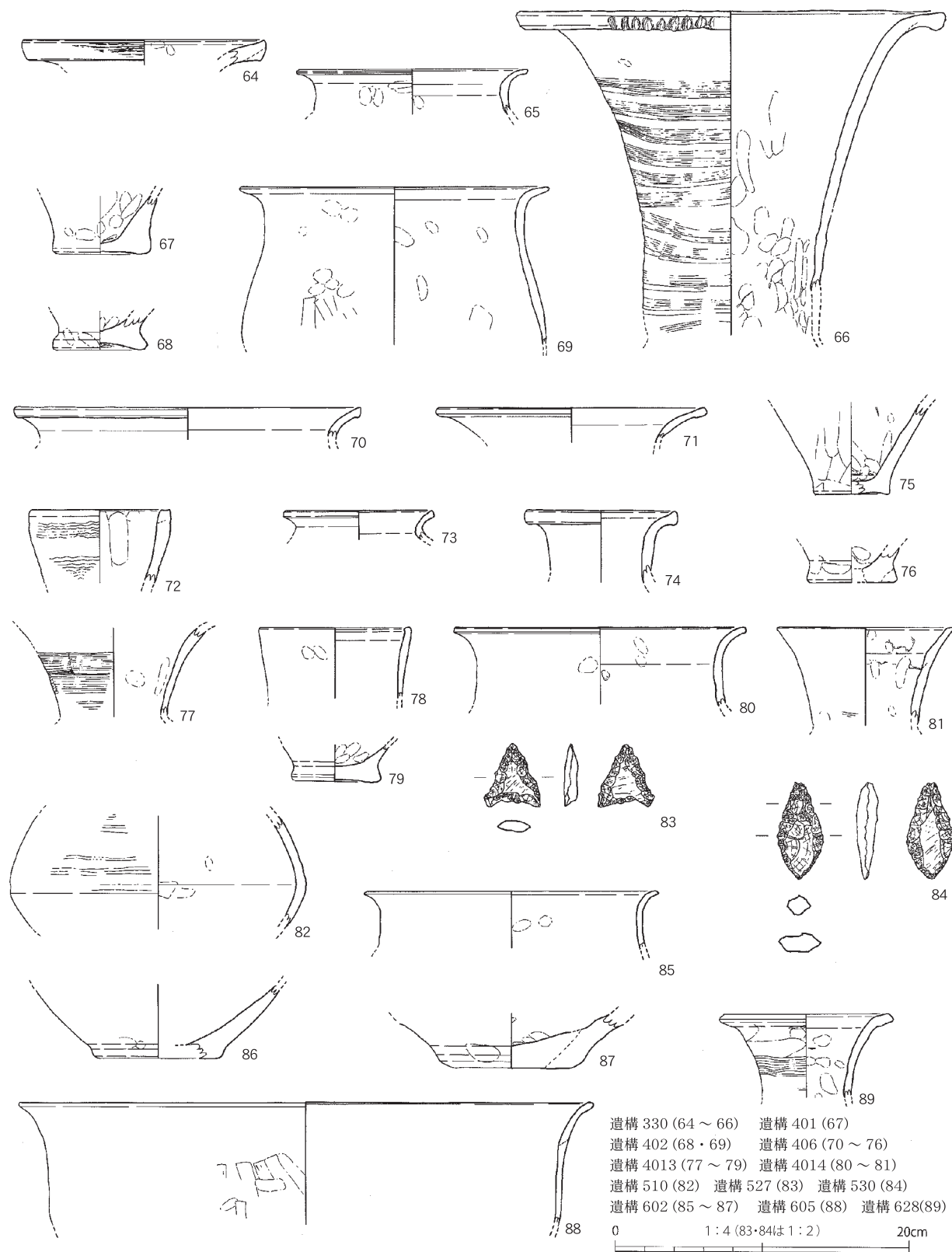


図20 東渋田遺跡出土遺物実測図 (2)

生駒山西麓地域からの搬入品である可能性がある。(83)は凹基式の、(84)は凸基式の石鉢でありともに先端部をわずかに欠いている。(85)は甕になるものと思われ、内外面とも灰褐色を呈している。(86・87)は弥生土器の壺底部である。(88)は甕の口縁部、口径は40cm近くと大きなものである。(89)の壺は頸部から外反気味に立ち上がり、口縁端部がかすかに肥厚している。頸部上位に櫛描直線文が施されている。

これら3～7区出土遺物については、概ね弥生時代中期前半に帰属するものと考えている。

【7～9区出土遺物】

(90)は弥生土器の短頸壺になるものと思われ、摩滅が著しく調整については不明だが、口縁端部にV字形の刻み目が施されている。(91～95)は弥生土器の甕の底部で、いずれも紀伊形甕と呼ばれるタイプになるものと思われる。(96)は広口壺で、ほぼまっすぐ立ち上がった後、口縁部は外反し、頸部には櫛描による文様が施されている。(97)は紀伊形甕の口縁部である。(98)は平基式の石鉢で石材はサヌカイトである。(99～101)についても紀伊型甕になるものと思われる。この7～9区の遺物についてもその時期は弥生時代中期前半に求められよう。

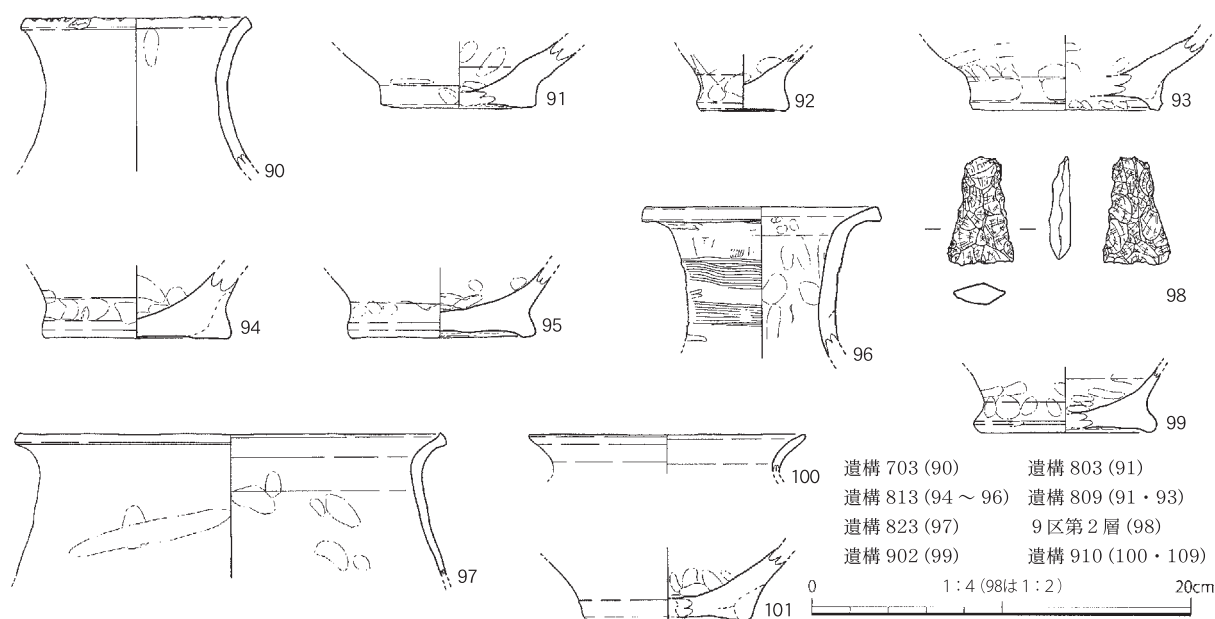


図21 東渋田遺跡出土遺物実測図(3)

4. まとめ

今回の調査区1～9区を概観すると、西側の調査区である1・2区、とくに1区においては遺構密度は低い状況であった。

この付近は基盤層の堆積土も礫質となっており、居住域には適しなかったものと考えられる。その分後世の攪乱も少なく、中世に遡る可能性のある水田跡も確認している。おそらく当該地付近は中世段階で水田の開発が行われ、それ以降今日に至るまで生産基盤としての役割を担ってきたものと思われる。

2区以東については、基盤層の堆積土もシルト質でしっかりしており、遺構密度も高くなっている。ただし、先にも述べたように4区の西側を境としてそこから西については、後世の水田化に際してかなり削平を受けたことやその後の住宅建設などによって著しい攪乱を受けているため全体としては遺構の残りは良くない状況であった。

これに比べて4区の東側以東については、後世の削平を受けてはいるものの全体としては遺構密度も高く、また残りの良い状況であり竪穴住居2棟を含む数多くの遺構が検出されている。この区域では古代及び中世の遺物はまったく確認されておらず、弥生時代中期と一部弥生時代終末期から古墳時代前期にかけてと思われる遺物に限定される。とくに弥生時代中期前半と思われる遺物の多いことが特徴である。かつらぎ町域及びその近隣においては、これまでこの時期の遺物・集落が確認されておらず空白となっていたが、今回の調査によりその空白を埋める資料を得たものといえよう。

先にも述べた今回の調査区のすぐ南側の渋田小学校の発掘調査では、この時期の遺物はまったく確認されておらず、集落が形成されるのは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてとされている。この結果から今回の調査地付近に中期前半にまず集落が形成され、その後一時途絶えた後、場所を南側に移して集落が再形成されたとも考えられる。

表2 出土遺物観察表(土器)

()は復元・推定値

遺物	地区 取上区画	層位 遺構・層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
1	西洪田 1区	包含層	近世染付	小型碗?	(8.2)	(3.5)	—	口縁部 20%	緻密 茶色極小粒少量入る	外)灰白色(2.5GY8/1) 内)灰白(5GY8/1)	反転復元
2	西洪田 1区	サブト レ1	輸入白磁	碗	(14.8)	(3.0)	—	口縁部 10%	緻密	外)灰白(5Y7/2) 内)灰白(5Y7/2)	反転復元
3	西洪田 1区 C10・p2	包含層	須恵器	杯蓋	(12.1)	(2.7)	—	5%	緻密 1mm大の石英極微量含む	外)灰(N5/ 内)灰(N6/)	反転復元
4	西洪田 1区 C9・t25	包含層	須恵器	杯身	—	(2.1)	—	5%	蜜 1mm大の石英少量入る	外)灰(N6/ 内)灰(N5/)	反転復元
5	西洪田 1区 C10・u3	—	弥生土器	広口壺	(24.0)	(3.1)	—	口縁部 20%	蜜 φ2mm大の赤色チャート粒,φ1 mm大の黒色粒チャート(?),φ2~5mm 大の石英雲母,少量入る	外)にぶい黄橙(10YR7/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	反転復元
7	西洪田 1区	018	土師器	高杯	—	(5.85)	(10.8)	脚部 90%	蜜 1~2mm大の石英,2~3mm大の橙 色粒チャート少量含む,0.5~1cm大の 泥岩(?),雲母を含む	外)にぶい橙(7.5YR6/4) 内)にぶい赤褐(5YR5/4)	
8	西洪田 1区 C9・p25	019	土師器	高杯	—	(6.9)	(10.9)	脚部 70%	蜜 1~2mm大の泥岩(?),1~2mm大の 茶色粒チャートを含む	外)にぶい黄橙(10YR7/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	
9	西洪田 2区 C10・p2	030	須恵器	高杯	(11.4)	8.0	(8.9)	60%	蜜 φ1~3mm大の石英を含む	外)灰(N5/ 内)灰(N4/)	部分復元
10	西洪田 1区 C10・p3	030	土師器	高杯	(14.0)	(9.7)	—	75%	蜜 1~2mm大の石英,1~2mm大の 黒・茶色粒チャートを含む,雲母極微 量含む	外)にぶい黄橙(10YR7/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	
11	西洪田 1区 C10・p3	030	土師器	高杯	—	(7.1)	(8.7)	脚部 60%	緻密 1~2mm大の石英,1~2mm大の 赤色粒チャートを含む	外)にぶい黄橙(10YR7/4),橙 (7.5YR7/6) 内)にぶい黄橙(10YR6/4)	
12	西洪田 2区 C10・o2	030	土師器	高杯	—	(7.6)	(11.1)	脚部 70%	蜜 1mm大の石英を少量含む	外)橙(7.5YR7/6) 内)橙(7.5YR7/6)	
13	西洪田 2区 C10・o2	030	土師器	高杯	—	(7.0)	—	脚部 70%	蜜 1mm大の石英,1~2mm大の赤 色・白色粒チャートを含む	外)橙(5YR6/6) 内)橙(7.5YR7/6)	
14	西洪田 2区 C10・p2	030	土師器	高杯	(20.5)	(4.5)	—	口縁部 5%	蜜 1mm大の石英,5mm大の片岩を少 量含む,2~3mm大の赤色粒チャート 少量含む	外)にぶい黄橙(10YR7/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	反転復元
15	西洪田 2区 C10・o2,p2	030	土師器	壺	(24.8)	(10.9)	—	口縁部 20%	蜜 1mm大の石英多く入る,2~5mm大 の石英少量含む	外)明黄褐(10YR6/6) 内)灰黄褐(10YR6/2),明黄褐 (10YR6/6)	反転復元
16	西洪田 2区 C10・o2	030	土師器	壺	(14.4)	(10.1)	—	口縁部 20%	蜜 1~2mm大の石英,2~5mm大の橙 色・灰白色粒チャートを含む	外)にぶい黄橙(10YR6/4),橙 (7.5YR6/6) 内)にぶい黄橙(10YR6/4)	反転復元
17	西洪田 1区 C10・p2	030	土師器	壺 (甕?)	(16.9)	(6.3)	—	口縁部 20%	緻密 3~4mm大の石英,5mm大の赤色 粒・3~5mm大の黄色粒チャート含む	外)橙(5YR6/8) 内)橙(5YR6/8)	
18	西洪田 1区 C10・p2	030	土師器	小型壺	(12.0)	(3.8)	—	口縁部 15%	緻密 1~2mm大の石英,1~3mm大の 赤色粒チャートを含む	外)橙(5YR6/6),オリーブ灰(2.5GY6/1) 内)橙(5YR6/6)	
19	西洪田 2区 C10・o2	030	土師器	鉢	(12.0)	(4.2)	—	口縁部 10%	蜜 1~2mm大の石英,片岩含む赤色 粒チャート少量含む,雲母含む	外)にぶい黄橙(10YR5/3)~黒 (2.5Y2/1) 内)にぶい橙(7.5YR6/4)	反転復元
20	西洪田 2区 C10・p2	030	土師器	小型 丸底壺	—	(2.8)	3.5	30%	蜜 1~2mm大の石英,1mm大の赤色粒 チャートを含む,雲母含む	外)橙(7.5YR6/6),灰黄褐(10YR4/2) 内)明褐(7.5YR5/6)	
21	西洪田 2区 C10・o2,3	030	土師器	小型 丸底壺	—	(4.4)	4.5	底部 70%	蜜 1~2mm大の石英,1~2mm大の橙 色粒チャート、雲母含む	外)にぶい褐(7.5YR5/4),橙(7.5YR6/6) 内)橙(7.5YR6/6)	
22	西洪田 2区 C10・o2,3	030	土師器	壺?	—	(1.8)	(3.1)	底部 40%	蜜 1~2mm大の石英少量,1~3mm大 の白橙色粒チャート含む	外)にぶい褐(7.5YR5/4) 内)にぶい橙(7.5YR6/4)	反転復元
23	西洪田 1区 C10・p2	035	土師器	高杯	15.4	(7.1)	—	杯部 80%	蜜 2~3mm大の石英,2mm大の片岩泥 岩(?)少量含む,雲母,3~5mm大の赤色 粒チャート含む	外)橙(5YR6/6),灰(5Y4/1)~オリーブ 黒(5Y3/1) 内)明赤褐(5YR5/6)	
24	西洪田 1区 C10・u2	039	土師器	甕	—	(4.1)	4.3	底部のみ	緻密 1~2mm大石英含む,1mm大の黒 色粒チャート含む,雲母少量含む	外)褐灰(7.5YR4/1) 内)にぶい黄橙(10YR6/4)	
25	西洪田 1区 C9・s25	073	土師器	甕	(14.6)	(7.9)	—	口縁部 25%	蜜 2~3mm片岩を少量含む,1mm大の 赤色チャートを含む	外)浅黄橙(10YR8/4) 内)浅黄橙(10YR8/4)	
26	西洪田 2区 C10・m3	包含層	須恵器	杯蓋	(13.9)	(3.8)	—	口縁部 30%	蜜 1mm大の石英少量含む,1~2mm大 の黒色粒チャート含む	外)灰白(5Y7/1) 内)灰(5Y6/1)	反転復元
27	西洪田 2区 C10・m2	包含層	須恵器	杯蓋	(12.6)	5.0	7.9	60%	緻密 1~2mm大の石英少量,1~2mm 大の黒色粒チャート少量含む	外)灰(N5/) 内)灰(5/)	部分復元
28	西洪田 1区 C10・p3	045	土師器	高杯	—	(6.6)	9.8	脚部 90%	蜜 2~3mm大の石英,砂岩(?)多く含む	外)浅黄橙(7.5YR8/4) 内)橙(7.5YR7/6)	
29	西洪田 1区 C10・p3	045	土師器	高杯	—	(7.5)	(10.9)	脚部 50%	緻密 1~5mm大の石英を含む,1~2 mm大の赤色粒チャートを含む	外)橙(7.5YR6/6) 内)橙(7.5YR6/6)	

出土遺物観察表(土器)

()は復元・推定値

遺物	地区 取上区画	層位 遺構・層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
31	西洪田 2区 C10・I3	080	瓦器	碗	(14.1)	(3.3)	—	口縁部 10%	蜜 1mm大の石英,1~2mm大の赤色粒 チャート少量含む	外)橙(2.5YR7/6),灰白(7.5YR8/2) 内)淡赤橙(2.5YR7/4)	反転復元
32	西洪田 2区 C10・I3	080	瓦器	碗	(14.4)	5.5	6.9	35%	蜜 1mm大の白色粒,黒褐色粒少量含む	外)灰(5Y6/1),灰(N4/) 内)灰白(5Y7/2),灰(N4/)	部分復元
33	西洪田 2区 C10・I1	097	土師器	壺?	(19.6)	(6.2)	—	口縁部 10%	蜜 1~2mm大の石英,2mm大の片岩,2 ~5mm大の赤色粒チャート含む	外)橙(7.5YR7/6) 内)橙(7.5YR6/6)	反転復元
34	西洪田 2区	098	土師器	土錘	長さ 3.8	幅 1.3	—	100%	φ0.1mm白色石粒,赤色チャート粒を 少量含む	外)にぶい黄(2.5Y6/2) 内)黄灰(2.5Y4/1)	
35	西洪田 2区 C10・I2	099	土師器	小型甕	(16.5)	(9.0)	—	口縁部 10%	蜜 1mm大の石英,2mm大の片岩含む	外)明赤褐(2.5YR5/6) 内)暗褐(7.5YR3/3)	反転復元
36	西洪田 2区 C10・I2	100	須恵器	広口壺	(12.8)	(8.6)	—	口縁部 20%	緻密 1mm大の石英少量含む	外)灰(5Y5/1) 内)灰(5Y5/1)	反転復元
38	西洪田 2区 C10・m2	103	須恵器	杯身	(10.7)	(3.5)	—	口縁部 10%	緻密 1mm大の石英少量含む	外)灰(5Y6/1) 内)灰(5Y6/1)	反転復元
39	西洪田 2区 C10・I2	103	須恵器	杯身	(10.9)	5.0	(6.3)	60%	緻密 1~2mm大の石英を少量含む	外)灰(5Y6/1) 内)灰(5Y6/1)	部分反転
40	西洪田 2区 C10・m2	103	土師器	壺or甕	(17.0)	(5.8)	—	口縁部 55%	蜜 1~5mm大の石英・片岩・砂岩,1 ~3mm橙色粒チャートを多く含む	外)灰白(2.5Y7/1) 内)灰白(2.5Y7/1),灰(N4/)	反転復元
41	西洪田 2区 C10・m2	103	陶器	壺?	(13.1)	(2.7)	—	口縁部 10%	緻密 1~3mm大の石英を少量含む	外)灰赤(2.5YR5/2),暗灰(N3/) 内)灰赤(2.5YR5/2)	
42	西洪田 2区 C10・I2	103	土師器	小型壺	(13.5)	(5.1)	—	口縁部 25%	蜜 3~5mm大の石英,片岩を多く含む	外)浅黄橙(7.5YR8/4) 内)灰黄(2.5Y6/2)	反転復元
43	西洪田 2区 C10・m2	103	土師器	甕	(22.8)	(12.1)	—	口縁部 20%	蜜 2~5mm大の石英,1~2mm大の石英少 量含む	外)橙(7.5YR6/6),暗灰(N3/) 内)橙(7.5YR6/6)	反転復元
44	西洪田 2区 C10・I2	103	土師器	製塩土器	(4.6)	(5.0)	—	口縁部 10%	蜜 1mm大の石英少量含む	外)淡橙(5YR8/4),浅黄橙(10YR8/3) 内)浅黄橙(10YR8/3)	反転復元
45	西洪田 2区 C10・I2	103	土師器	製塩土器	(3.8)	(3.9)	—	口縁部 5%	蜜	外)橙(7.5YR6/6) 内)橙(7.5YR6/6)	反転復元
46	西洪田 2区 C10・I2	111	須恵器	杯蓋	(11.8)	(3.4)	—	口縁部 5%	緻密 1~2mm大の石英を極少量含む	外)黄灰(2.5Y5/1) 内)灰(N6/)	反転復元
47	西洪田 3区 C10・h1~25	包含層	須恵器	杯身	(11.3)	(4.0)	—	口縁部 15%	緻密 1~2mm大の石英,1mm大の黒色 粒チャートを含む	外)灰(5Y6/1) 内)灰白(N7/)	反転復元
48	西洪田 3区 C10・j1,2,i1,2	包含層	土師器	高杯	—	(1.6)	(11.4)	脚部 50%	蜜 φ1~2mm大の石英,φ2~3mm大 の赤色粒チャート,3mm大の片岩を含 む	外)橙(2.5YR6/8)~橙(5YR6/6) 内)橙(5YR6/6)	反転復元
49	西洪田 3区	包含層	土師器	壺	(14.2)	(3.7)	—	口縁部 15%	蜜 φ1~2mm大の石英,1~2mm大の 赤色粒チャート,片岩片,雲母(?)含む	外)橙(7.5YR6/6) 内)橙(7.5YR6/6)	反転復元
51	西洪田 3区 C10・i1	059 下層	須恵器	杯蓋	(13.9)	4.4	3.8	60%	緻密 1~3mm大の石英,5mm大の石,1 mm大の黒色粒チャートを少量含む	外)浅黄(2.5YR7/3) 内)灰白(N7/) 断)灰(N5/)	
52	西洪田 3区 C10・i1	059 上層	須恵器	直口壺	(9.9)	(5.0)	—	口縁部 25%	緻密 1mm大の石英,1mm大の黒色粒チャ ートを含む	外)灰(5Y6/1),灰(N6/) 内)灰(5Y6/1)	反転復元
53	西洪田 3区	066	土師器	高杯	—	(5.5)	—	杯部 10%	蜜 1~3mm大の石英,炭化物を含む	外)明赤褐(5YR5/8) 内)橙(7.5YR6/6)	反転復元
54	西洪田 3区 C10・i1	059 上層	土師器	高杯	—	(7.6)	(12.0)	脚部 60%	蜜 1mm大の石英,1mm大の赤色粒チャ ートを含む	外)橙(5YR6/8) 内)橙(5YR6/8)	部分復元
55	西洪田 3区 C10・j2	066	土師器	高杯	—	(1.5)	(15.2)	脚部 5%	蜜 1mm大の石英,少量含む	外)明赤褐(5YR5/6~5/8) 内)明褐(7.5YR5/8),明赤褐(5YR5/6)	反転復元
56	西洪田 3区 C10・j1	066	須恵器	杯身	(12.6)	3.8	(6.3)	口縁部 20%	緻密 1mm大の石英,1mm大の黒色粒チャ ートを含む	外)灰(N5/) 内)灰(7.5Y6/1)	反転復元
57	西洪田 3区 C10・j1	066 下層	土師器	小型壺	(9.4)	(7.8)	—	口縁部 20%	蜜 1~2mm大の石英少量含む	外)にぶい橙(2.5YR6/4) 内)褐灰(10YR4/1),灰黄褐(10YR4/2)	反転復元
58	東洪田 1-1区	機械 掘削時	弥生土器	直口壺	—	(3.9)	—	5%以下	緻密 1~3mm大の石英,5mm大の石,1 mm大の黒色粒チャートを少量含む	外)橙(10YR6/6~7/6) 内)浅黄橙(10YR8/4),橙(5YR6/6)	
59	東洪田 1-1区 D8・o22	第2層	瓦器	碗	(10.5)	(4.0)	—	口縁部 5%	蜜 1mm大の石英を微量含む	外)灰(N5/) 内)灰(N4/)	反転復元
60	東洪田 1-1区 D8・k22	第2層	瓦質土器	すり鉢	(29.0)	(5.4)	—	口縁部 15%	蜜 1~5mm大の石英を多く含む	外)黄灰(2.5Y4/1)~浅黄(2.5Y7/4) 内)暗灰(N3/) 断)橙(2.5YR6/6)	反転復元

出土遺物観察表(土器)

()は復元・推定値

遺物	地区 取上区画	層位 遺構・層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
61	東洪田 1-1区 D8・i22	第2層	青磁	碗	(12.3)	(3.7)	—	口縁部 5%以下	緻密	外)オリーブ灰(10Y5/2) 内)オリーブ灰(10Y5/2) 断灰(10Y6/1)	反転復元
62	東洪田 2区 C9・g3	第3層	須恵器	杯蓋	(10.2)	(2.4)	—	口縁部 20%	緻密 1mm以下の石英を少量含む	外)灰(N5/) 内)灰(N5/)	反転復元
63	東洪田 1-2区 D8・d22	53	縄文土器 (?)	深鉢	(30.0)	(14.6)	—	口縁部 5%以下	粗 1~3mm大の石英を多量に含む	外)にぶい黄橙(10YR5/4)~褐灰 (10YR4/1) 内)褐灰(10YR5/1)	反転復元
64	東洪田 3-1区 B9・v2	330	弥生土器	壺	(16.4)	(1.7)	—	口縁部 10%	蜜 1mm大の石英,1mm大の赤色粒 チャート,雲母を含む	外)にぶい橙(7.5YR7/4~6/4) 内)にぶい橙(7.5YR7/4~6/4)	反転復元
65	東洪田 3-1区 B9・v2	330	土師器	壺?	(15.6)	(3.1)	—	口縁部 10%	粗 1~2mm大の石英,片岩を多く含む	外)にぶい黄橙(10YR7/2) 内)にぶい黄橙(10YR7/2)	反転復元
66	東洪田 3-1区 B9・v2	330	弥生土器	長頸壺	(29.1)	(22.0)	—	口縁5% 全体40%	蜜 1~2mm大の石英を含む,雲母微量含 む	外)褐(10YR4/4) 内)褐(10YR4/4)~にぶい黄褐 (10YR5/4)	部分復元
67	東洪田 4-1区 B9・n2	401	弥生土器	甕	—	(3.9)	(6.6)	底部のみ	粗 1~5mm大の石英,片岩を多量に含む	外)明赤褐(2.5YR5/8) 内)明赤褐(5Y5/6)~灰褐(7.5YR4/2)	部分復元
68	東洪田 4-1区 B9・p2	402	弥生土器	甕	—	(2.7)	6.4	底部 100%	蜜 1mm大の石英,泥岩(?)多量に含む	外)にぶい黄橙(10YR7/3) 内)にぶい黄橙(10YR7/3)	部分復元
69	東洪田 4-2区 B9・p2	402	弥生土器	甕	(21.1)	(10.7)	—	口縁部 10%	粗 1mm大の石英,片岩を含む	外)暗褐(10YR3/3) 内)黒褐(2.5Y3/1)~にぶい橙 (7.5YR6/4)	反転復元
70	東洪田 4-1区 B8・n25	406	弥生土器	紀伊形 甕	(23.4)	(2.2)	—	口縁部 10%以下	蜜 2~3mm大の片岩・石英を多く含 む,赤色粒チャート少量含む	外)明褐(7.5 Y R 5/6) 内)黒 (2.5 Y R 2/1),にぶい黄褐(10 Y R 5/3)	反転復元
71	東洪田 4-1区 B8・n25	406	弥生土器	甕	(18.2)	(2.3)	—	口縁部 10%	粗 1~2mm大の石英,礫粒多量に含む	外)褐灰(10YR5/1)~にぶい黄橙 (10YR6/4) 内)灰黄褐(10YR5/2)	反転復元
72	東洪田 4-1区 B8・n25	406	弥生土器	直口壺	(9.5)	(5.0)	—	口縁部 10%	蜜 1mm大の石英・炭・褐色粒礫を多く 含む	外)にぶい黄橙(10 Y R 6/4) 内)にぶい橙(7.5 Y R 7/4)	反転復元
73	東洪田 4-1区 B8・n25	406	弥生土器	小型甕	(10.1)	(2.0)	—	口縁部 10%以下	蜜 1mm大の石英を少量含む	外)にぶい黄褐(10YR5/3),橙 (2.5YR6/6) 内)灰黄褐(10YR4/2)	反転復元
74	東洪田 4-1区 B8・n25	406	弥生土器	細頸壺	(10.0)	(4.9)	—	口縁部 10%以下	蜜 1~3mm大の片岩,石英を多く含む	外)橙(5 Y R 6/6) 内)橙(5 Y R 6/6)	反転復元
75	東洪田 4-1区 B8・n25	406	弥生土器	壺	—	(6.2)	(5.2)	底部 50%	蜜 1~3mm大の石英を含む,1cm大の 礫・1mm大の赤色粒チャート少量含 む	外)にぶい黄橙(10YR7/3) 内)にぶい黄橙(10YR7/3)	反転復元
76	東洪田 4-1区 B8・n25	406	弥生土器	紀伊形 甕	—	(3.1)	(6.2)	底部 20%	蜜 1mm大の片岩・石英・黒色粒礫を多 く含む	外)橙(5 Y R 6/6) 内)にぶい黄橙(10 Y R 6/4),にぶい橙 (5 Y R 6/4)	反転復元
77	東洪田 4-2区 B9・p1	4013	弥生土器	長頸壺	—	(5.1)	—	頸部 90%	蜜 1mm大の石英少量,片岩多く含む	外)浅黄橙(10YR8/3) 内)浅黄橙(10YR8/3)~褐灰(10YR6/1)	
78	東洪田 4-2区 B9・p1	4013	弥生土器	細頸壺	(10.2)	(4.8)	—	口縁部 10%	粗 1mm大の石英・片岩多く含む,1 mm大の赤色粒チャート少量含む	外)にぶい黄橙(10YR7/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	反転復元
79	東洪田 4-2区 B9・p1	4013	弥生土器	壺	—	(2.5)	(6.1)	底部 90%	粗 1~3mm大の石英・片岩を多く含む	外)にぶい褐(7.5YR5/2) 内)灰黄褐(10YR5/2)~黒(10YR2/1)	部分復元
80	東洪田 4-2区 B9・g2	4014	弥生土器	壺	(19.8)	(5.2)	—	口縁部 10%	蜜 1~2mm大の石英・片岩を含む	外)灰黄褐(10YR4/2) 内)にぶい黄橙(10YR7/3)	反転復元
81	東洪田 4-2区 B9・g2	4014	弥生土器	長頸壺	(11.9)	(6.6)	—	口縁部 10%	蜜 1mm大の石英・礫粒多く含む	外)にぶい黄橙(10YR7/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	反転復元
82	東洪田 5区 B9・i1	510	弥生土器 (生駒 産?)	壺	—	(7.7)	—	5%以下	蜜 1~2mm大の石英,雲母を含む	外)にぶい褐(7.5YR5/6),褐灰 (7.5YR4/1) 内)橙(7.5YR6/6),灰褐(7.5YR4/2)	反転復元
85	東洪田 6区 B9・i1	602	弥生土器	甕or鉢	(20.0)	(3.9)	—	10%以下	蜜 1mm大の石英,片岩礫粒多く含む	外)灰褐(7.5YR6/2),にぶい橙(5YR6/4) 内)灰褐(7.5YR6/2),橙(5YR6/6)	反転復元
86	東洪田 6区 B9・i1	602	弥生土器	壺	—	(5.0)	(8.7)	底部 20%	蜜 1mm大の石英少量,2~3mm大の石 英少量,1~2mm大の片岩を含む	外)橙(5YR6/6) 内)褐灰(7.5YR4/1)	反転復元
87	東洪田 6区 B9・i1	602	弥生土器	壺・甕	—	(3.7)	(9.7)	底部 50%	粗 1~2mm大の石英・礫粒多く含む	外)にぶい黄橙(10YR7/3) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	反転復元
88	東洪田 6区 B9・i1	605	弥生土器	甕	(38.8)	(8.3)	—	10%以下	蜜 1~2mm大の石英・片岩を含む	外)灰黄褐(10YR6/2)~にぶい橙 (7.5YR6/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)~橙 (7.5YR6/6)	反転復元

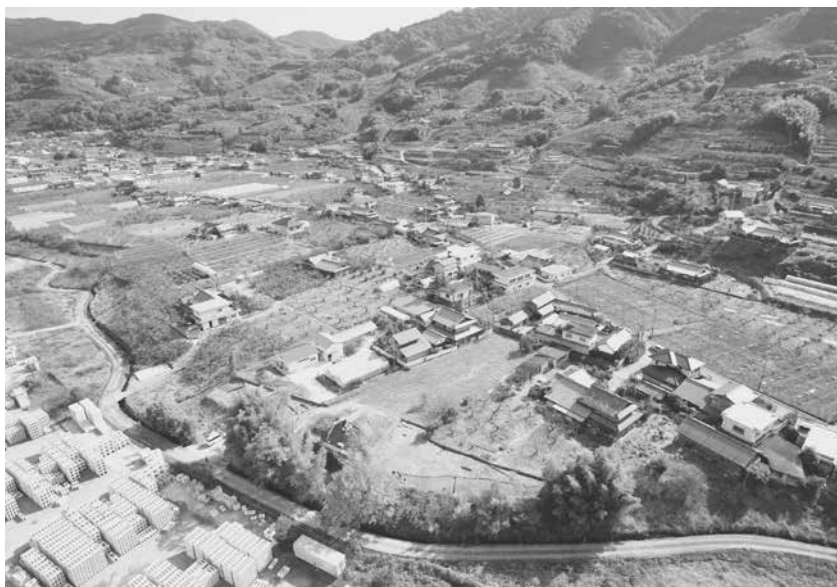
出土遺物観察表(土器)

()は復元・推定値

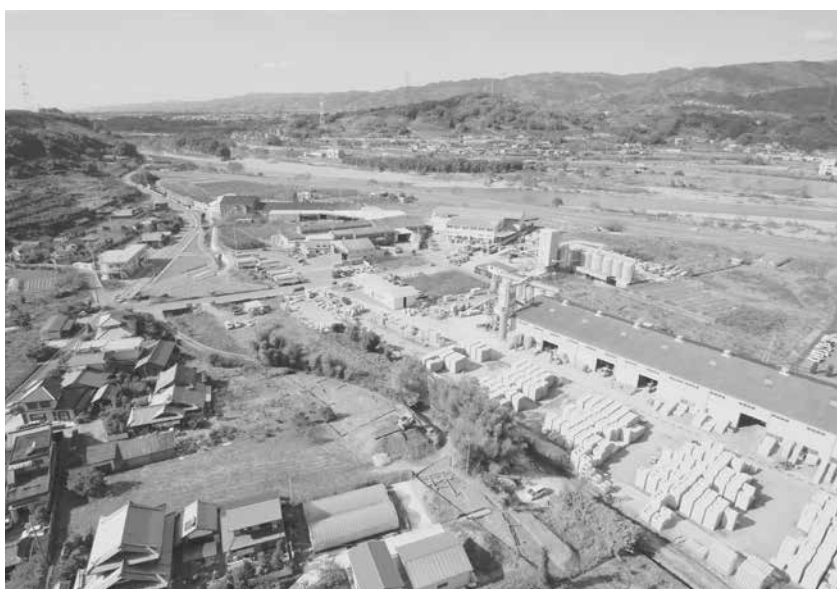
遺物	地区 取上区画	層位 遺構・層位	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	備考
89	東浜田 6区 B9・j1	628	弥生土器	壺	(11.8)	(5.7)	—	口縁部 25%	蜜 1mm大の石英,1~2mm大の片岩を多く含む	外)にぶい褐(7.5YR5/4) 内)橙(7.5YR6/6)~浅黄橙(10YR8/3)	反転復元
90	東浜田 7区 B9・g2	703	弥生土器	短頸壺	(11.6)	(8.1)	—	口縁部 25%	蜜 1~2mm大の石英,2~3mm大の片岩・長石を多く含む	外)にぶい黄橙(10YR7/4) 内)にぶい黄橙(10YR7/4)	反転復元
91	東浜田 8区 B9・b1	803	弥生土器	紀伊形 甕	—	(3.5)	(8.1)	底部 45%	蜜 (やや粗) 1~2mm大の石英,片岩を多量に含む	外)灰(5Y6/1) 内)にぶい橙(5YR6/4)	反転復元
92	東浜田 8区 B9・c25	809 (901)	弥生土器	紀伊形 壺	—	(3.0)	(4.7)	底部 100%	蜜 1~2mm大の片岩,石英を多く含む	外)にぶい橙(5YR6/3) 内)にぶい黄橙(10YR7/3)	部分復元
93	東浜田 8区 B9・c25	809 (901)	弥生土器	紀伊形 甕	—	(3.9)	(10.1)	底部 40%	蜜 1~2mm大の石英,黒色粒石を含む	外)褐灰(10Y6/1~5/1),暗灰(N3/ 内)灰(5Y6/1~5/1)	反転復元
94	東浜田 8区 B9・e2	813	弥生土器	紀伊形 甕	—	(3.8)	(10.0)	底部 25%	蜜 1~2mm大の片岩・石英を多く含む,5mm大の礫含む	外) 橙 (7.5YR7/6) 暗灰 (N3/ 内) 浅黄橙 (10Y R8/3)	反転復元
95	東浜田 8区 B9・e2	813	弥生土器	紀伊形 甕	—	(3.7)	(9.6)	底部 100%	蜜 2~3mm大の片岩・石英を多く含む	外)にぶい黄橙(10YR6/4),橙 (7.5YR7/6) 内)橙(7.5 Y R7/6),褐灰(7.5YR5/1)	部分復元
96	東浜田 8区 B9・e2	813	弥生土器	長頸壺	(12.3)	(8.0)	—	口縁部 25%	蜜 1mm大の石英・黒色粒石多く含む,1~2mm大の赤色粒チャート含む,5mm大の礫含む	外)にぶい赤褐(5YR4/4) 内)明赤褐(5YR5/8),赤褐(5YR4/6)	反転復元
97	東浜田 8区 B9・g1	823	弥生土器	紀伊形 甕	(22.3)	(7.6)	—	口縁部 20%	蜜 1~2mm大の片岩・石英を多量に含む,赤色粒チャートを少量含む	外)灰黄褐(10YR6/2~5/2) 内)にぶい黄褐(10YR6/3)~にぶい橙 (7.5YR7/4)	反転復元
99	東浜田 9区 B8・a25	902	弥生土器	紀伊形 甕	—	(3.5)	(9.0)	底部 40%	蜜 1~2mm大の石英,1~3mm大の片岩を多く含む	外)にぶい黄橙(10YR7/3),褐灰 (10YR4/1) 内)灰白(10YR8/2)	反転復元
100	東浜田 9区 B8・e25	910	弥生土器	紀伊形 甕	(14.5)	(2.0)	—	口縁部 15%以下	蜜 1mm大の石英・片岩を多く含む	外)灰褐(7.5YR4/2) 内)橙(7.5YR7/6)	反転復元
101	東浜田 9区 B8・e25	910	弥生土器	紀伊形 甕	—	(3.8)	(8.8)	底部 30%	蜜 1~2mm大の石英・片岩を多く含む	外)浅黄橙(10 Y R 8/4) 内)浅黄橙(10 Y R 8/4)	反転復元

表3 出土遺物観察表(石器)

遺物	地区 取上区画	層位 遺構・層位	種類	器種	石材	法量 (cm)			残存率	備考
						長軸	短軸	厚さ		
6	西浜田 1区 C9・u25	包含層	打製石器	石鏃 (有茎式)	サヌカイト	2.7	1.3	0.5	95%	先端部、茎部が欠損
30	西浜田 4区 C10・o3	045 上層	礫石器	凹石・敲石	砂岩	14.8	10.5	5.6	90%	側面部に1cm弱の凹み有
37	西浜田 3区 C10・l2	100	打製石器	スクレイ パー?	サヌカイト	14.7	8.7	3.1	80%	未成品か?
50	西浜田 2区	表採	打製石器	石鏃 (凹基式)	サヌカイト	2.15	1.55	0.3	98%	ほぼ完型
83	東浜田 5区 B9・l2	527	打製石器	石鏃 (凹基式)	サヌカイト	2.15	1.9	0.5	80%	端部欠損
84	東浜田 5区 B9・l2	530	打製石器	石鏃 (凸基式)	サヌカイト	3.35	1.55	0.7	90%	先端部のみ欠損
98	東浜田 9区 B8・b25	第2層 (精査)	打製石器	石鏃 (平基式)	サヌカイト	2.8	1.75	0.6	80%	先端部が欠損



1. 調査地遠景1 (北西上空から)



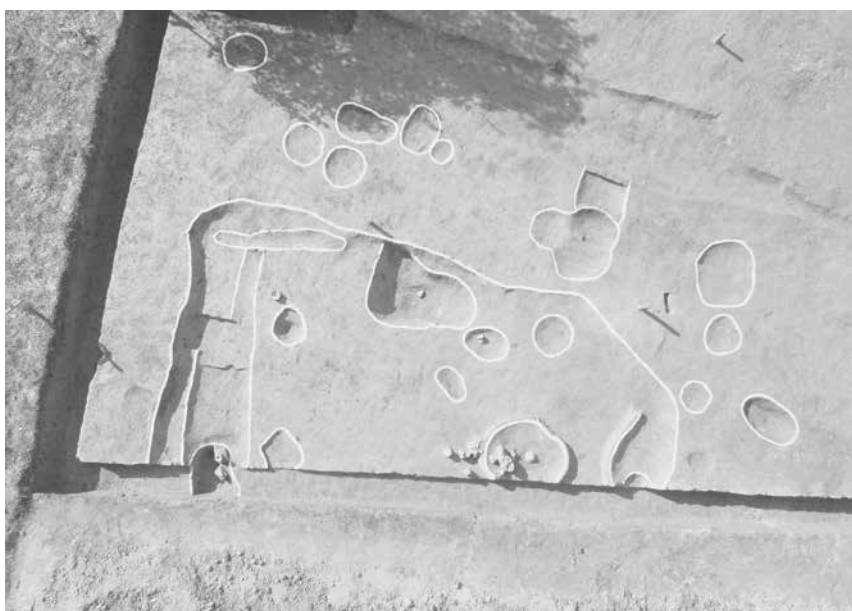
2. 調査地遠景2 (南東上空から)



3. 1区全景(上空から)



1. 1区全景(東から)



2. 1区 030 竪穴住居(上空から)



3. 1区 030 竪穴住居(南から)



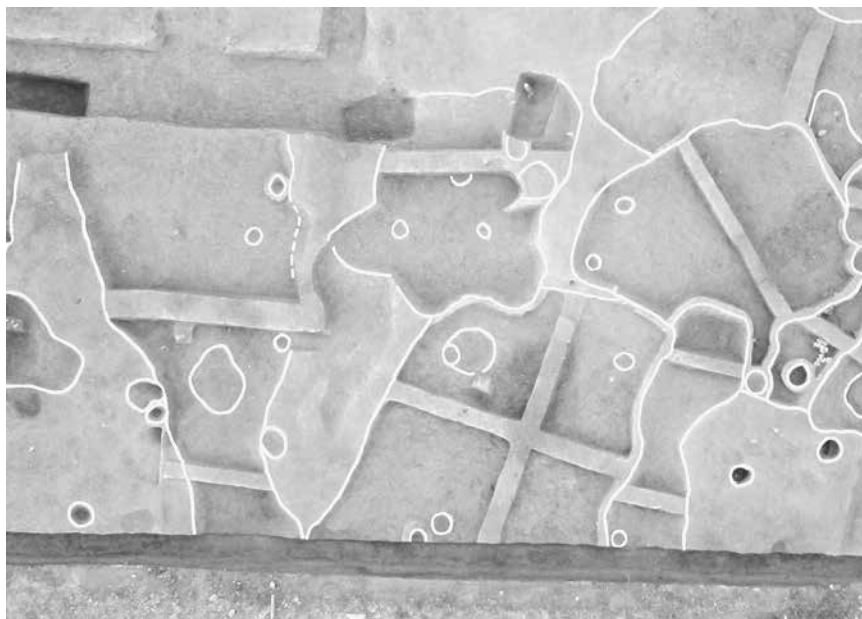
1. 1区035カマド遺物出土状況(北から)



2. 2区全景(上空から)



3. 2区全景(南東から)



1. 2区堀立柱建物跡(上空から)



2. 2区135 竪穴住居(南から)



3. 2区100 土坑遺物出土状況(東から)



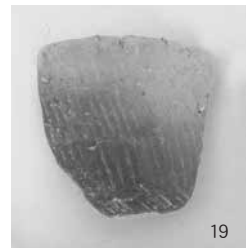
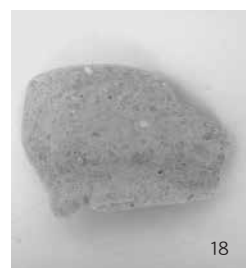
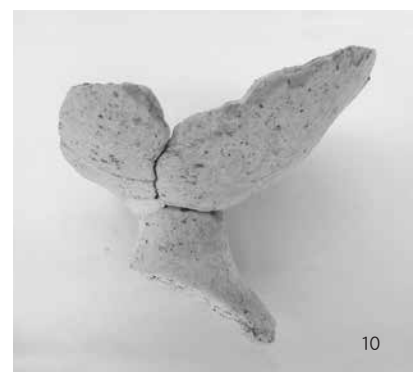
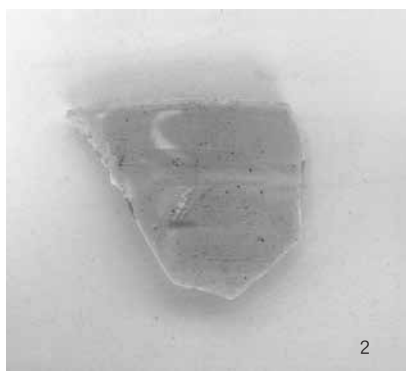
1. 2区 080ピット
遺物出土状況(東から)

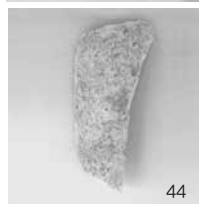
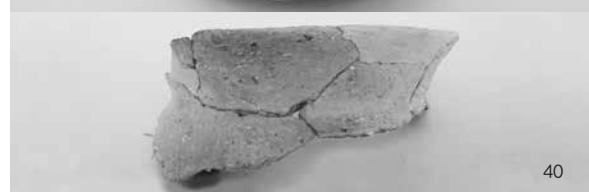


2. 3区全景(上空から)



3. 3区 066・059・072 溝(東から)







1. 1-1区・2区遠景(東上空から)



2. 1-1区全景(上空から)



3. 1-1区全景(東から)



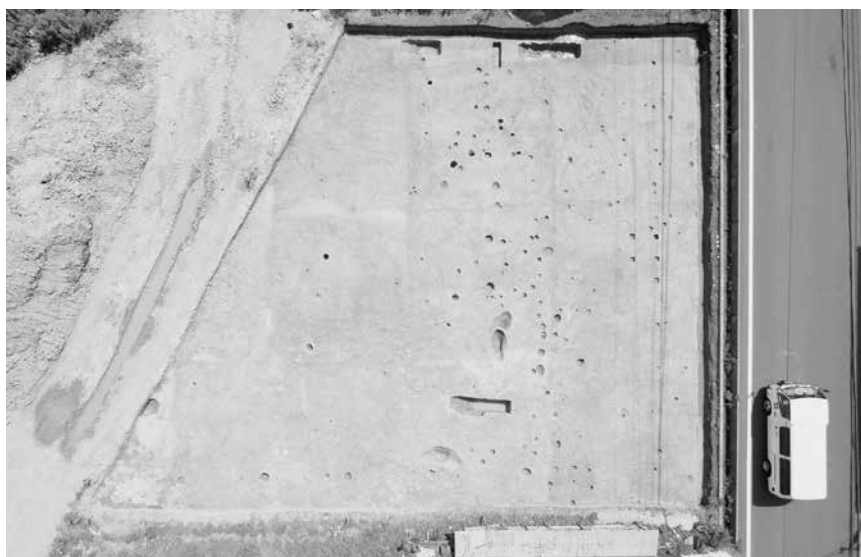
1. 1-1区西半部全景(東から)



2. 1-2区全景(上空から)



3. 1-2西端遺構(東から)



1. 2区全景(上空から)



2. 2区南東側遺構群(北西から)



3. 2区 315 溝半裁状況(南から)



1. 3～9区調査地遠景(南東上空から)



2. 3-1区全景(上空から)



3. 3-1区全景(東から)



1. 3-1区330溝(南南東から)



2. 3-1区330溝遺物出土状況(北東から)



3. 3-1区330溝セクション(東から)



1. 4-2・5-1区全景(東から)



2. 4-2区西端遺構群(北西から)



3. 4-2区401土坑(北西から)



1. 3-2・4-1区全景(東から)



2. 4-1区4026 竪穴住居(北から)



3. 4-1区と3-2区の境段差状況(北から)

1. 7-2・8・9区全景(上空から)

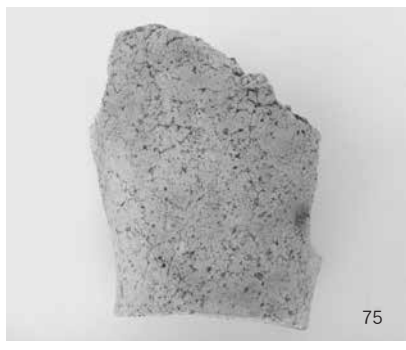
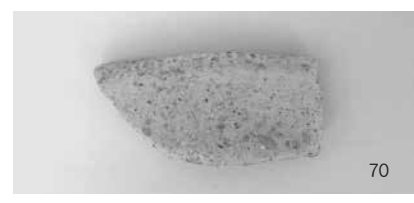
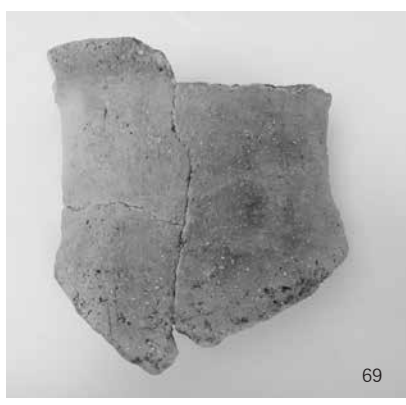
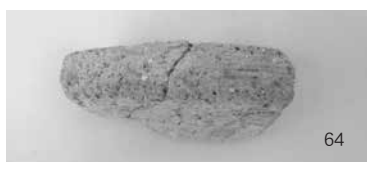
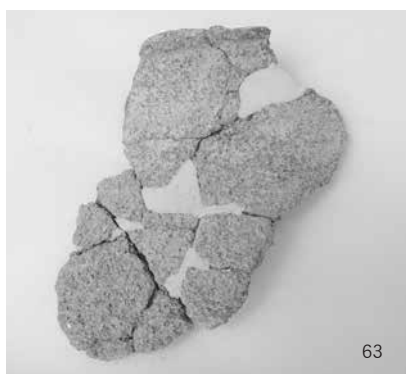


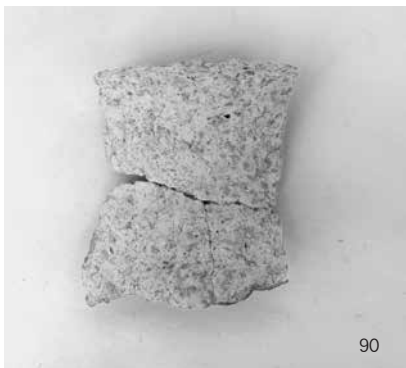
2. 7-2・8・9区全景(西から)



3. 8・9区 809 竪穴住居(西から)







報告書抄録

ふりがな	にししづたいせき ひがししづたいせき							
書名	西渋田遺跡・東渋田遺跡							
副書名	和歌山橋本線道路改良事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	村 田 弘							
編集機関	公益財団法人和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8301 和歌山県和歌山市岩橋1263番の1 Tel.073-471-3710							
発行年月日	西暦2015年 9 月 30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "			
にししづたいせき 西渋田遺跡	かつらぎ町 にししづた 西渋田	30341	29	34° 16' 40"	135° 27' 50"	2011年9月27日 ～2011年12月28日	975㎡	道路改良
ひがししづたいせき 東渋田遺跡	かつらぎ町 ひがししづた 東渋田		7	34° 16' 44"	135° 28' 30"	2013年5月8日 ～2013年11月25日	1,917㎡	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
西渋田遺跡	集落	弥生時代		土坑		弥生土器		特になし
		古墳時代		土坑・堅穴建物・溝		須恵器、土師器、石製品		
		中世		ピット・土坑		瓦器、土師器、青磁、白磁		
東渋田遺跡	集落	弥生時代		土坑・堅穴建物		弥生土器		弥生時代中期前半に帰属する堅穴建物2基を検出
		中世		ピット・土坑・堀状遺構・落ち込み		瓦器、土師器、青磁		
要約	<p>西渋田遺跡の発掘調査では、古墳時代中期の堅穴建物を検出したほか中世に帰属する掘立柱建物を1棟検出した。</p> <p>東渋田遺跡においては、弥生時代中期前半に帰属すると考えられる堅穴建物2基を検出した。当該地付近においては、この時期の建物跡が検出されたのははじめてのことであり、集落の展開・変遷を考える上で貴重な資料である。</p>							

西渋田遺跡・東渋田遺跡
 —和歌山橋本線道路改良事業に伴う発掘調査報告書—

2015年9月30日

編集・発行 公益財団法人 和歌山県文化財センター
 印刷・製本 初田印刷株式会社